

連
句

猫蓑作品集Ⅺ



序

「猫蓑作品集Ⅺ」は平成十二年十一月、投稿された会員の作品、総数七十五巻を収録したものである。内訳は歌仙三十四巻（昨年は三十巻）・源心四巻（昨年は六巻）・二十韻十二巻（昨年は十三巻）・半歌仙二十一巻（昨年は十二巻）・短歌行一卷（昨年は十一巻）えびら（昨年なし）・表合せその他二巻（昨年と同じ）で、いささか註を加えると、短歌行と半歌仙の増減はその年の国民文化祭の募吟の種類によるものであろうし、百韻は紙幅の関係であらかじめ、投句をおことわりしたのであった。紙幅を申せば、この十一号から投句は一人一篇、捌きは猫蓑会員のことという制限が加わった。しかも尚、ほぼ昨年度の第十号（総数七十九巻）に近い数に達した

ことは、この一年の会員各位の活動と志向を示している
ものである。

いよいよ幕を明けた二十一世紀、その新しい時代に叶
った新しい魅力のある連句を創り出すことが、私たちの
最も急務であろうが、そのためには私たちが昨年一年間
努力したものが、どのようなものであったか、この「猫
蓑作品集Ⅺ」を熟読反省することからはじまると思う。

平成十三年一月二十日

東 明 雅

目次

序	東	明雅	1
歌仙 「秋うらら」	東	明雅	6
合評	明雅・和子・けんのすけ・暁巳		8
慎二・豊美・守男			
司会・文責	健悟		
歌仙			
七変化	青木秀樹	捌	24
昼寝人	浅賀淑代	捌	26
草いきれ	市野沢弘子	捌	28
蓑虫や	今宮水壺	捌	30
別れ鴉	内田麻子	捌	32
古雛	加藤道子	捌	34
穂薄の	金久保淑子	捌	36
遅るとも	蒲原志げ子	捌	38
蕎麦を刈る	倉本路子	捌	40
体内レンズ			
膳所の辺り			
秋祭			
暮早し			
円の大小			
花火筒			
日時計の			
小名木川			
定家忌や			
索麺の出汁			
鎌倉に			
水の香や			
江の島や			
良夜かな			
紅梅や			
権頭和弥			
坂本孝子			
式田和子			
繁原敏女			
島村暁巳			
下鉢清子			
鈴木美奈子			
染谷佳之子			
橘朱鷺子			
豊田好敏			
長崎和代			
中田あかり			
橋野代々子			
長谷川芳子			
八角澄子			
権頭和弥			
坂本孝子			
式田和子			
繁原敏女			
島村暁巳			
下鉢清子			
鈴木美奈子			
染谷佳之子			
橘朱鷺子			
豊田好敏			
長崎和代			
中田あかり			
橋野代々子			
長谷川芳子			
八角澄子			

ハムラビの刻文 … 原田千町 捌 72

冬野 … 日高英二 捌 74

夏の庭 … 日高玲 捌 76

涅槃図に … 佛淵健悟 捌 78

秋の気配 … 本田弥生 捌 80

はりはりと食む … 松本碧 捌 82

地歌舞伎の … 本屋良子 捌 84

旅路 … 矢崎藍 捌 86

土用太郎 … 八代嫋 捌 88

翡翠の … 山口美恵 捌 90

源 心

源心や … 佐古英子 捌 94

冬立つや … 膝送り 96

達子・冬乃・碧

かりん・淑子

春浅き … 副島久美子 捌 98

蒼穹へ … 吉村ゑみこ 捌 100

二十韻

組鐘の … 青島ゆみを 捌 104

まてば椎 … 小池啓子 捌 106

エンデバーの … 五味蓉子 捌 108

似顔絵描き … 近藤守男 捌 110

立冬や … 杉山壽子 捌 112

散り紅葉 … 文音 114

智恵・碧

やすこ・要子

黒き種 … 高瀬美保 捌 116

万代で … 武村利子 捌 118

彼岸会や … 文音 120

明雅・貞子・郁子

秋祭 … 村田富美 捌 122

立冬や … 宮川侑子 捌 124

絵志野 … 山田歌子 捌 126

半歌仙

小抽斗	青木泉水	130
樟若葉	秋山志世子	132
風の甲斐	池田やすこ	134
返り梅雨	稲垣渥子	136
江戸百景図	梅田利子	138
風炉点前	木村真呂	140
萩咲くや	加藤治子	142
鴨のこゑ	川名将義	144
芽木山	桑原美津	146
母馬の瞳	久保田庸子	148
秋日和	式田恭子	150
水琴窟	須賀敬子	152
初花を	鈴木千恵子	154
虎が雨	武井雅子	156
杜若	谷本守枝	158
アルプスを	田村満子	160

春渚	長坂節子	162
柱の瑕	生田目常義	164
長崎南蛮余情	登坂かりん	166
光琳の	伴野末季	168
蟹気楼	松原弘子	170
みなとみらい	山本要子	172
短歌行		
小さきふぐり	中野昌子	174
簾		
蛤と化る	百武冬乃	176
発句 猫六句	秋元正江	178
表合せ あはゆきを	正江・路子・朱鷺子	179
あとがき	下鉢清子	180

偏屈^{ナオ}と言はるる父と春スキー

呑みつくしたるむさしのの盃

うつすらと埃をかぶる仏和辞書

幼馴染が嫁ぐ寂しさ

あの頃はオカマオカマと罵られ

水の鏡に身を投げる鬼

雌河童連日連夜攻めよせて

辣菲食うてしのぐ夏瘦

長考の一手で遂に名人に

宇宙を割きて降りし隕石

無窮動弦の切れたる塔の月

裏方^{ナウ}さんに届く御所柿

横顔^{ナウ}のどこやら似たるお命講

初めて逢ひし曾孫抱き上げ

からからと廻りはじめる風見鶏

はるかに望む残雪の山

花冷えの甲板に立つ舞踏家よ

波にひろがる海髪の紅

平成十二年十月二十六日 首尾

於 世田谷区羽根木公園「星辰堂」

二雅代樹玲悟 二雅代樹玲悟 二雅代樹玲悟 二雅代樹玲悟

合 評

——二十一世紀の連句をめざして——

出席者（発言順）

東 明雅・式田 和子・太田けんのすけ

島村 暁巳・鈴木 慎二・高橋 豊美・近藤 守男

佛淵 健悟（司会）

平成十二年十二月九日

於 渋谷区東郷神社「水交会」

司会 本日は師走のお忙しい中お集まりいただきまして有

難うございます。すでにお配りしてあります歌仙「秋うらら」の巻を鑑賞しながら、連句に関するいろいろな問題を浮き彫りにできればと思います。お集まりの皆様は三度のメシより連句が好きという方々ばかりですから、どのようなことをお話しただいても面白いことになると思っております。今までは式田先生にこそ司会いただきましたが、あのような自在な司会はとてもできませんが、どうぞ実のある話し合いになりますよう、よろしくお願いいたします。その前に明雅先生一言お願いいたします。

明雅 このような合評会は数年続いております。連句につ

いて皆様これはいいい作品だ、これは悪いというようなことをおっしゃいますが、何が基準になつてそのようなことになるのか、今日のお話を通して伺えたら有難

いと思います。忌憚のないご意見をお願いします。

司会 有難うございます。式田先生、何か一言。

和子 この頃思いますのは、皆様連句がお上手になつて、もつともつと面白いものをとという方向に動いているように感じますが、これからの連句が面白ければそれでもいいのかということ、真面目でもなおかつ面白いということができるのかどうか、そのところを考えてみたいと思います。

序破急

司会 明雅先生の『新炭俵』の中に、連句採点法というところがありまして、連句の一句一句の面白さ、付味、

転じ、最後に全体の序破急のポイントを挙げられていて、一巻の鑑賞には全体から細部に入つた方が狂いが

ないということですので、この「秋うらら」もまず全体の感じから入っていつてみたいと思います。それでは先ずけんのすけさんからどうぞ。

けんのすけ 私は、流れや展開がどうなっているのかなあという、漠然とした捉え方なのですが、そういう意味では表、ウラ、名残の表と、悪い展開じゃない、最後の納め方もなかなかいいのかなあと、そういう印象でした。

司会 曉巳さんいかがですか。

曉巳 はい。ええと、全体を眺めていましてちよつと面白くなりすぎてはいしないかなあと、具体的にはいろいろありますが、まずそんな印象を持ちました。

司会 連句における面白さというのはいろいろありそうですね。慎二さん、いかがですか。

慎二 私は連句は瞬間の芸だという印象を持っています。歌手や役者が舞台で自分を表現するようにですね。そういうことが連句の面白さを作っていると思うんです。この作品がいいとか悪いとか言う以前に、その場に参加した人達が面白がって意気投合しているところがあれば、それはそれでいいんだろなど。それが記録に残って、第三者にとっても、三箇所くらいこれはいいなというところがあれば、もうそれでいいんじゃないかと思えます。

ないかと思えます。

司会 豊美さんいかがですか。

豊美 自分が参加していない一巻を読んで、序破急を読みとるのは難しいというのが実感です。ただ、どこまでが序、どこからが破というのにあまり固定的には考えない方がいいのではないかと、という感じもあります。それと名残のウラになって、それまでの面白すぎたことに対しブレイキをかけているような感じもあります。

守男 最後になるとだんだん言えることが少なくなるのですが、表と名残のウラは運びがいいなと思いました。

司会 式田先生はいかがでしょう。

和子 細かいことを言ってもしょうがないんですが、先生この一巻は頑張つてらっしゃいますね。

明雅 何が（笑）。

和子 面白くしようとする努力がこちらに見えますから。

明雅 いやいやいや、そういう下心はありませんよ（笑）。

和子 ないですか。

明雅 うん、ない。これには作者名を書いてないからお分りにならないと思うけどこれは膝送りなんです。だからね、一人で私が頑張つたってできない。

司会 明雅先生の今までの作品とちよつと違つたところがあるという感じなんでしょうか。

和子 そうですね。

豊美 出勝ちのときはいいのですが、膝送りだと自分の句を立派に作りたがると言いますか、序破急にまで気持ちがいかないということがあると思うのですが。

明雅 膝送りでもいろいろあるんでしょうけれど、膝送りをやつて一応私が見て良ければそのまま付け、まづいと思つたのは一直してもらうという……。

暁巳 明雅先生捌きの膝送りということですね。

明雅 そうですね。

明雅 芭蕉の作品も膝送りですけども、芭蕉の手が入つておりますからねえ。

司会 皆さんは捌きをされていて序破急の意識はいかがですか。

けんのすけ 私の場合、起転承結みたいな感じなんですよ。起承転結じゃなくて。

司会 もつと具体的に言いますと……。

けんのすけ 起承だと表と裏が一緒になつてしまいますから、表が起だつたら裏に來たら転なんですね、ここです。そうやつて転じた後にナオが受けていき、で最後が結と。それはあくまでも感じ方ですよ。というのは、

裏と名残の表はちよつと違つと、その違つところを序破急の破の中に全部含めるんじゃないかとその「転・承」のところで考えてみたいと。

司会 なるほど。近藤さんはどうですか。

守男 表六句は序の部分で、名残の裏は急として、そこは、まあ一応キープして押さえちゃうんですよ、気持ちの上でね。それから後は流れや雰囲気任せます。

暁巳 序破急ということもありますが、付く付かないに重点を置きますね。どうしても初心の方に多いんですが、いい句を作つて、あるいは俳句的な句を作つて待つているということがありますが、捌きとしては一句一句に惚れ込まない姿勢が大事かと思ひます。序破急とは少し外れましたが……。

豊美 私も、表は穏やかに、裏は転じて始めるように、ナウも穏やかに収めるということは考えますが、裏とナオに関してはやはり流れに任せるべきだと思ひます。裏に入つてすぐにこういう句はダメとか、面白すぎるからとかありますが、やはりそこでいい句が出て付いているのであればそれを頂き、そのあと又考えていけばいいんだと思ひます。

司会 序破急ということの意識のされ方は同じ猫蓑の中にも幅があるようですね。

明雅

私はね、裏は破の一段、名残の表は破の二段と区別を付けてやっているつもりですけども、実際やってみるとどうも思う通りにはならないことが多いですね。でも最初は心に決めてそうやるという念願は持っています。

曉巳

どうも連衆が禁止規定ばかりで頭がいっぱいになるというのはうまくない感じがしますね。捌きも、これはダメという言い方でなく、この句はこういうところなら生かせるという言い方で引き立てていく姿勢が大事ですよ。

けんのすけ

自然を詠んでいる場の句と人事句のかね合っても大事なことかと。三十六句で世界を切り取ってみせる訳ですから。時事句が少し弱い感じもしました。

明雅

それについてちょっと申し上げるんですけどね、だいたいあの時事句を俳諧に取り込むというのは明治以後、昭和になって、特に牛耳先生が取り上げられ、いい句を残された。そこからなんですね。というのはね時事句を詠めばそれは前句付けの川柳の方向に行ってしまうし、純粹に自然を詠めば俳句になる。どうして時事を詠まなかったかといえば、時の政を批判することの怖れもあったんだと思います。それを破ったのはいいのですが、だけど、時事句はそのときの面白さだ

けが興味であって、そこを離れば興味がなくなるし関心もなくなる。作品は残る物ですからね。私はそれは入れたくないという、そういう気持ちがありますね。意識して時事句を省いたんじゃないんですけれども、そういう気持ちが影響しているんだろうと思いますね。

けんのすけ

後世の鑑賞に耐えうる時事句というのはあるかと思いますが、明雅先生、前に仰っていました、消費税が問題になっている頃は何処に行っても消費税反対の句ばかりだねえと。許六の「十団子も小粒になりぬ秋の風」でしたか、ああいう感じで、あれも時事かなと思うんですね。時事句の工夫の仕方もあるんでしょうね。

和子

時事句で、こういうのは半年もせずに訳がわからなくなるなあというのがございますでしょう。今面白いのを作りたいのは分かりますが、捌きとしてはためらう時が多いです。せめて半年はもつような時事句を作っていたできませんと(笑)。

曉巳

歌仙でも時事句が一句もなくても私はまったく気にありませんね。時事句をくださいなんて言うこともあります。

けんのすけ

昨日は十二月八日でジョン・レノンの命日

でしたが……。

曉巳 豊美さんは昨日が真珠湾の日だと知ってましたか。

豊美 知りませんでした(笑)。

司会 守男さん、いかがですか。

守男 ちょっと気になる句なんです、ウ2の「金も命も女に握られ」というのがありますが、女を「すけ」と読ませるのは、古い人間なせいとか、抵抗がありますね。

曉巳 打越の「マフィア」は西洋ヤクザでしょう。それと、同じ面に「蛸部屋」が出て来て、これもヤクザっぽいんですよね。「蛸部屋」の花の句は面白いんだけど、ヤクザがらみはどうかなくて、ありますね。

豊美 守男さん仰ったのはそれもあるけど言葉の問題ですよ。わざわざ使うことでそういう雰囲気を出すというところもあるでしょう。

守男 ただ私、前句が「蔵入りの杜氏集まる振舞に」でしょう。その付味としてどうかと、その意味でも言っているんです。

明雅 いや、これは白状しますと私の句なんです(笑)。

「金も命も女に握られ」じゃ語調が合わないし、二字で表す方法はないかと考えたんですけど、どうしてもない。だからこれを使ったまでであってね。

曉巳 レコというのはいかがでしょう。レコは男ですかね。

和子 男の方から言う女でしょう。

明雅 成る程、レコに握られか、うーん、それがよかったかなあ(笑)。

豊美 俳言はそうした俗な言葉もいうわけですよ。連句が世界全体を材料に扱うのであれば、裏に入ったらこの世界にあるものはなんでも使っていんじゃないかと思うんですが。

守男 よく分かります。

けんのすけ ま、これヤクザっていうより、中学生なんかでも「マブいスケだなあ」って平気で言うもんね。

豊美 私は言ったことないですけど(笑)。

司会 一巻を好ましく感じる時、一巻の中に惹き付けられる句があるかどうか大きな要素ですね。

慎二 裏の「銅板の詩篇に土のやはらかき」なんてのはいいですね。

曉巳 前の句と並べてとてもいい。

けんのすけ 「おたまじゃくし」と「春スキー」これも割に好きです。面白いなあと思ったのは、ナオの「水の鏡に身を投げる鬼」から「辣菲食うてしのぐ夏瘦」までね、面白くやつてるなど。

恋の句

豊美

異論があるんですが。「幼馴染が嫁ぐ寂しさ」はこれはいんですが、その次はちよつと。「オカマオカマ」なんて。これは恋の句なんでしょうか。それと、「水の鏡に身を投げる鬼」は恋じゃないと思うんですが。その後に「雌河童」と出てきてるのがちよつと恋がヘンだなあと。先程何を使つてもいいと言いましたが、「オカマ」というような差別語を使つて、それで恋だと言われても困るし、折角の「幼馴染が嫁ぐ寂しさ」の気持ちとそぐわない気がします。

司会

明雅先生、この辺り、どうでしょうか。

明雅

ええ、裏の恋と差をつけましてね、「幼馴染が嫁ぐ寂しさ」、これは勿論恋句ですね。「あの頃はオカマオカマと罵られ」これも恋の句です。「水の鏡に身を投げる鬼」これも恋です。「雌河童連日連夜攻めよせて」これは恋になるかならんか、これはね、前句の「鬼」に対する「雌河童」なんです。異類ということですね。化け物、そういうものを出したまでであつて、これは恋にはならないと思います。

曉巳

昆さんのカッパを思い出しました……。

慎二 「オカマ」はここではね、差別語ではないんですよ。

オカマになるような男はいい男なんですよ（笑）。

豊美 はい、分かりました。

司会

明雅先生、ここは「幼馴染」から「辣蕪食うて」まで恋句と考えることはできないんですか。「夏瘦」は恋之詞の「恋瘦」に似てますし……。

明雅

恋は五句までいいんですから、そう考えることも出来なくはないですね。

豊美

オカマつて罵つてゐるわけですよ。もう少し綺麗に行きたいというのがあります。

守男

「ニューハーフ」とか、「おだてられ」とか。

けん

のすけ おだてられる方がいいよね。

慎二

やつかまれてゐる状態のことなんです。やつかまれ」がいいんじゃないかしら。

明雅

いやあ、皆さんの蘊蓄を聞いていると……（笑）。

和子

勉強になりますね（笑）。

司会

女性の側からはどうですか。

和子

はつきりそういうのを言っちゃ悪いというのがあるから、却つて言わないかも知れませんね。

司会

恋句で、女性と男性、作り方や展開のさせ方、違ふんでしょうか。

和子

ある程度年いった人は、みんな我慢しちゃうとか、

そういう方向にいく傾向ありますね。

司会 辛抱する恋ですね。

和子 うんと若い人場合はへいちゃらね。言いつ放し。

守男 裏の「腰細き男に盗ませたるポルシェ」とありますが、「腰細き男」なんて男性は言わないんじゃないですか。

豊美 イタリアの伊達男って感じですね。

暁巳 恋句は深読みすると凄じこと言ってる句というのがありますよね。ところが女性には、故意か本当に知らないのか、深読みしませんね、取えて。綺麗にとりますね。司会 恋句で読み手を感動させるというのは難しいですね。

明雅 難しいです。

豊美 私が覚えているのは、明雅先生の連句入門の教室で出された句で、倉本路子さんの「次の世も女であたゝい菊枕」です。

司会 他の人に記憶されるような恋句はいいですね。

和子 なかなかないですよ。

慎二 女の方はロマンチズムを好みますね。オペラに包むから時に食い足りないことはありますが、ですがやっぱりうまいですよ、女の人の恋句は。

暁巳 連句やつてるから恋句を詠めるんで、これは連句の

功德の一番かも知れないです。お捌きにも、出た恋句は全部ご紹介下さいとお願ひするんですよ。

明雅 近頃は俳句で恋を詠む人がいますが、あれは連句の影響もあると思いますよ。

発句と俳句

司会 「男が詠む恋句、女しか詠めない恋句、両方が一座して恋句の幅が広がる」と、そのようにまとめておきましょうか。さて一句一句の面白さということで、中でも発句は特別なものですが、この「秋うらら」の発句はどうですか。発句と俳句ということにも触れられればと思いますが。

守男 俳句と発句はやはり違うなと思います。俳句をやり始めたのは発句をなんとかしなければと思ったのが動機です。この「秋うらら野良と鳥のパラダイス」ですが、パラダイスは、楽園、天国で、ギリシャ語では公園という意味もあるそうです。明るく、和やかな、子供っぽい感じもありますが、これからどう始まるんだろうと期待させます。

暁巳 私も発句の会やってますが、発句、俳句の違いがなかなか見えてこず、一巻を引っ張る句を作るのもむず

かしいです。この「秋うらら」について言いますと、軽くていいと思います。野良猫と鳥、都会の中のメルヘンを発句にし、発句らしい発句というところから離れていていいですね。これで巻いてみたいという気持ちが始まるのがいい発句なのではないでしょうか。

慎二 最初から決められるものではないとも言える面もあり、一卷終つてああいい発句だったんだと、そういうこともありますね。発句はやはり俳句と違って言い切るものじゃないから、その余韻にどう応えたか、後からでないと分からない部分もあります。そういう意味では、次の脇は絶妙な脇だと思う。「磴」は字面から見ると硬いけど団栗が跳ねているわけです。詩情があるし、かわいさがあります。

司会 発句の挨拶性ということで、こうして客観的に鑑賞されると同時に、一方では一座している人々にのみ共感されているメッセージがあったはずだという、このところは俳句と違うんじゃないですか。

和子 発句が立派すぎて後の人が付けられないという時がありますね。そういう時は後が付けられる発句を頂くのがみんなのためというのがありますね（笑）。

豊美 うまい言い方ですね。句の批評じゃなくて、次が付けにくいからと言えば誰も傷つきませんからね

（笑）

和子 そうよ、後が付けられないからと言えば、出した人が何で自分の句をとらないと言うときでも、ならしやあないかと。そうやって進めていかなきゃならない時もあるでしょう。

豊美 非常に心象的で抽象的な発句で、脇を付けられないことがあり、作者に聞くと一応分かるんですが、連句で出す以上は具体的な方がいいと思うんです。そういう意味では、この「秋うらら」は分かりやすく、付けやすいし、明るく始まる感じですよ。只「パラダイス」という言葉はもうちょつと、他になかったかなと……。

慎二 和子先生のお言葉ですがね、言葉遊びの文芸というものに携わろうとしているのであれば、付け易からうが付けにくからうが、やつぱりそれに付けなければいけない、そこが面白いんじゃないかと思うんですが。連衆の器量もみていないといけないから……。

慎二 それはそうなんだけど（笑）。

豊美 付け易くないといけないというのは発句はやはり挨拶ですからね。

慎二 ああ、そういう意味ではね。

暁巳 それとね、連句で強いて言えば、用意していかないといけないのは唯一発句なんですよ。なら、早めに

来て作るというのが理想かと思えます。あらかじめ頑張った発句は採られなければ採られないで不満だし、採られてもどうもその場にそぐわない、わかりにくいということがあるように思うのです。

明雅 芭蕉も軽い発句を好んだといいますが、それはそういう付け易いということを考えてのことでしょうね。あんまり深刻なことを最初から出すと参っちゃって付けられないですね。

司会 けんのすけさんのところでは若い方たちがいらっしやるようですが、発句の決め方はどうですか。

けんのすけ 私たちの会だとみんなで出してみんなで採ってというやり方で、余り苦労したことはないですね。

暁巳 発句が回ってきて、どうも頂けるものがないなあということがありますよね。発句の御再考はないんですね。とにかく丸の多いもので始めてしまいますよね。

けんのすけ 発句が全体を引つ張る使命ということを考えるとさういうこともあるんでしょうけれど、でもやはり集まった皆さんへのご挨拶と思へば、それはそれでいいんじゃないでしょうかね。

暁巳 連句作品の批評の第一はね、発句よろしきものなんですね、ほとんどはそこを言ってます。評価されるために作ってるんじゃないにしても、発句で妥協しない

というのも大事じゃないかと……。

けんのすけ そういう場合はどうなるんですか。発句のご再考をやりますか。

暁巳 いけませんかねえ。衆議判だと現実問題として難しいですね。

守男 衆議判っていうのは？

暁巳 みんなで寄ってたかって決めるということでしょうか。

豊美 明雅先生、衆議判というのは昔からあったんですか。

明雅 衆議判は歌合・連歌合・発句合に用いられた方法で、連句一巻の捌きに流用されたのはつい最近のことです。

豊美 やっぱりそうですか。私はあれは邪道じゃないかと思うんですが。連句は寄ってたかって善し悪しを決めるというものでもないし、捌きという責任者もいなくなっています。

花の句

けんのすけ 花の句ですが。「蛸部屋の」の句、それから「花冷えの甲板に立つ舞踏家よ」、どちらも技を使っ

いるというか、面白くしようとしているのを感じます。「蛸部屋」の方はいいとして、「花冷え」の方は、何かもう一遍物語が始まるような気がして、この辺りはどうなんでしょうか。

明雅 又話が始まるからだめだと仰るけれども、挙句ならそういうこと言えますけど、匂いの花ならまだいいんですよ。そしてこの句は形はできてるし、裏の花に較べてもね、花の場所も違うし、変化があつていいんじゃないかと思つて頂戴したんです。

和子 自分で捌く時はいつも思うんですが、発句は付け易いものを選んでと申し上げましたが、その発句が軽いと思えば、硬い脇で支えれば二句でそこは一つの世界だからそれでいい訳です。第三にいきますとね、猫糞の人が出す第三は決まつていると言われるんですよ。パイを焼いたとかね、よその結社の人にそういう印象があるようですね。また猫式の第三が出たと。それで、いい第三が出ればこれはうまく行くかなと思ひます。第三は本当に重いですよね。

豊美 けんのすけさんと違う意味で「蛸部屋」「花冷え」の句について思うんですが、もつと花そのものを生かすべきで、こういう強い句を作っちゃいけないと言われたことがあります。「蛸部屋」という言葉も強いし、

「花冷え」の方も「舞踏家」がメインで、花そのものが軽く、趣向を凝らしすぎとか、花を盛り立てるべきとか……。

明雅 そういう傾向が進んでいつて、例のパイになつてしまふんじゃない（笑）。

豊美 こんな風に花を押しつけるような強いものを持つて来ていいんですか。

明雅 珍しい材料を見つけて詠めばそれもまた花を盛り立てることになるんですよ。

豊美 なるほど。

慎二 「蛸部屋」の花の句、技巧を感じさせますが、暗い部屋を出てバツと明るい花を仰ぎ見るなんてのは、むしろ花が際だつていてうまいなと思ひましたけれど。
明雅 「蛸部屋」で花が引き立つてますよ。「花冷え」は花の姿はないから「舞踏家」で花の代りを出したということです。

付けと転じ

司会 それではですね、次に今までの所と重なる部分もありますが、付けと転じということでお話をしていただきますと思います。

慎二 「笛吹きケトル」から「蛸部屋」句「おたまじゃくし」句が、続いている感じがなくありませんが、気分としては好きです。

豊美 私が引かなかったのは「厨子の裏金釘流の銘残り」に「笛吹きケトルビーポーと嘖く」、この付味が全然わからないんですが。

慎二 それから、ちょっと分からなかったのは、「呑みつくしたるむさしのの盃」

明雅 むさしのの盃はね、野見尽くさずというので大盃のことです。

豊美 はあ、シャレですか（笑）。

慎二 そうか、なるほどね。

和子 一つ覚えましたね。

明雅 「ケトル」はね、「奥義極めし剣禅の道」とあるでしょう。これ古いものですね。それに、「厨子の裏金釘流の銘残り」と、これ又古いものだから何か新しい物を持つてきたいと思っただけですね。こういう軽いね、捨句、遣句もいいんじゃないかと思うんですよ。

和子 そうですね。

司会 明雅先生、捨句という言い方もあるんですか。

明雅 そうですね。遣句、捨句、同じ意味ですね。

明雅 ぎしぎしぎし付味をやっていくと、見る方でも

参るでしょう。だからそういう時、意味のないようなものが生きるんですよ。はりきったところでやるとなかなかこういう遣句出ないですね。

豊美 面はかわって離れてますが、「夏風邪」と「夏瘦」は猫蓑流ではチェックされる場所ですね。

慎二 さっきから思うのは、これは男っぽい一巻だなあと。

司会 どういうところがそうですか。

慎二 「マフィア」「銅板の詩篇」、それから「蛸部屋」、次の「かんからに飼ひ」これも男、裏の「うっすらと埃をかぶる仏和辞書」これも男、「オカマオカマと罵られ」これも男、「辣菲食う」男、「長考の一手」男、「宇宙を割りて」男、「裏方さん」もおそらく男、「御所柿」って言葉が大体男っぽい。それから「花冷えの舞踏家よ」これも男（笑）。面白いことを言ってるのは大概男だね、面白ければいいってもんじゃないけどさ。

司会 わかりました（笑）。

豊美 遣句が適当なところに入っているのがいいですね。

慎二 だんだんこの巻はいいな思ってくるよね（笑）。

司会 連衆がいい句というか、立った句をどんどん出して来るとき、その中で捌きがそれを外して遣句を選ぶと

いうのは難しいですよ。

豊美 余裕がないと遣句は出ないでしょう。

司会 明雅先生、今までのお話で、いかがでしょうか。

明雅 私の歌仙批評の四原則ですが、あれに触れていただき

ましたのもう特にありません。遣句、逃句の効用に触れて頂いたのも良かったと思います。

司会 ご参加の方々は連句活動ご熱心ですが、現在の連句の問題点などありましたら、これからの活動のヒントなど頂ければと思うのですが。

連句の可能性

けんのすけ 私は自分の住んでいる市内で無名会というのを作ってやってるんですが、十四五名の人が出入りしてますが、連句をやった人は少ないんです。私、一歩気にしていることは、やはりその人が来て面白いかどうかなんです。一人一人が来て先ずは面白いと思ってもらう。その上で自分がどういう風にいくかということを考えてもらうということが大切だと思います。なので、例えば、式目の話は最初はしなくていいので、やっていく中でお互い心を開ける時期もあるでしょうから、その時にここはこうしたら面白いよと、初めか

ら式目にいかない。つまり、明雅先生や和子先生が山として聳えているのなら、裾野をどれだけ広げられるのかも大切で、私の場合はそれを考えてみるのが自分の役割かなと思います。

曉巳

けんのすけさんが今仰ったように、先ず集まってやってみようということが大事なんだと思います。表のところで、出た句出た句に全部文句つけていつちゃうと、連句というのはなんて七面倒くさいものなんだろうと、工夫がないと始めての人にとっては途中で投げ出したくなる仕組みのものはありますね、連句は。しかし連句のこういう時間を共有するというのは凄いと、で、高校生のツツバリを集めて来て連句をやったら変わらぬと思うんです。それほど力のあるものであることは間違いない。それを現実始めるときの難しい問題というのがあります。

けんのすけ

ツツバリの高校生の話が出ましたが、そういうことを私もやってみる必要あるなと思ってるんです。確かに癒しになるし、孤独を救いますね。

慎二

猫糞で厳しく鍛えられていると、地方へ行ったら、最初はどくなるかと思っても、だんだんかるーくなって、楽だ、というのが実感です。大きな規範があって、その中に自由に心を泳がせる、そこが大事な

と感じます。

司会 有難うございました。豊美さん、いかがですか。

豊美 私は出来るだけ猫養会以外の所でも連句をやりたいと思っていますが、自他場についても、季節についても猫養で厳しく教えて貰ったことが生きていると思います。これは持論ですが、連句は現代文学であって近代文学ではないと。近代文学は作者が主体で読者はそれを読むだけですが、むしろ読者が主体で読む者が読むことで同時に作者になる、そういう意味で連句は現代的な文学だと思います。総合芸術的な映画とかパフォーマンスとか、連句はむしろそちらに似て、二十一世紀になってもますます発展する要素を持っていると思います。

司会 では守男さん。

守男 連句は創作活動に参加して初めて作品を鑑賞できるということを思います。それから、猫養は表六句の禁忌は厳しいですので、やり始めた当座はきついときもありましたが、そのお蔭でといえますか、国民文化祭などでは解放感がありとても楽しくできます（笑）。『連句入門』をいくら読んでもわからなかった事が、ぶつかり稽古で鍛えられて見えてきたことに感謝しています。反面、こんないいものを友人達に勧めるとい

うとき何がネックになるのか、これがなかなか難しいです。けんのすけさんのお話は参考になりました。

けんのすけ 先ほど豊美さんが言われた、連句は新しい世紀にも残っていく文学だということで、十九世紀の文学とは違うのだと、それは小説を指していると思いますが、その辺りは私も興味あるところなので、今後とも議論していつてみたいと思うところです。

曉巳 豊美さんが言われた詠み手即読者というのは、日本の歌の歴史ではごく普通のことでしたが、明治にきて個の確立というようなことが出てきて、正岡子規もそのような流れに乗って、連句に対してあんな風に言わざるを得なかったのだと思いますが、この期間を除けば、日本の文芸というのはずっと座の文芸であり続けていくわけで、今我々がやっている連句は歴史も現代もこの中に入っているんですね。そういった意味では連句は人間の歴史を背負い込んだ素晴らしい文芸だと思います。

慎二 言葉というのはマジックです。そもそも芸術という言葉ね、ということが芸術なんだと、非芸術とはなんだと、西洋の芸術至上主義みたいなものを取り込まざるを得なかった経過もあるだろうけれど、つまり芸術という言葉のマジックですね、これに惑わされて

はいけないという感じは常々ありますね。私は自分のやっていることを芸術とは思わないし、そう呼ばれたくないです。いかにも価値があるかのように使われるのが芸術という言葉でね。

司会

わかりました。では式田先生。

和子

先ほどけんのすけさんも仰いましたが、これからやはり裾野の人を広げないと連句は将来がないと思うのです。今は徹底的に裾野に肥やしをあげる時だと思いうし、私自身そこから動かないようにしようと思うのです。よそに行つて、捌いてくださいと言われる時があるでしょ、そういうときはヨイシヨです。誉められてうれしくない人はいないのですから。ヨイシヨに徹しようと思えば怖いものは何もありません。

司会

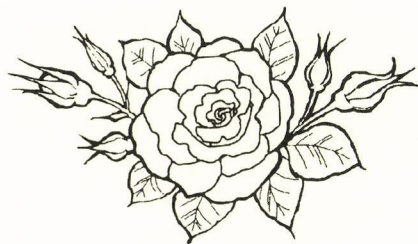
ありがとうございます。今日はたくさんお話して頂きまして、現在の連句のありようも浮び上がっているかと思ひます。明雅先生、やつぱり連句も文芸である以上、流派を越えて、作品として客観的に論じ合えるといいですね。連句特有の問題があるとは思いますが、それこそ連句の裾野が広がっていくためにも、開かれた批評は必要なことだと思いますが。

明雅

そこが連句の発展を妨げている原因の一つではありますね。身の内をいくら誉め合つたつてしょうがない

司会

ですからね。いや、今日はみなさんの意見を聞いてね、どういう連句に対する考え方をしておられるのか、連句とは何かをお伺いしたいと申しあげましたけど、私が考えていたのと全く同じことだったので安心しました。どうぞそのつもりでお進みください。



〃
歌

仙
〃

ナオ

校正をやうやう終へし弥生尽

ドアの重たきレントゲン室

南米の旅に出ようと誘はれて

石の遺跡の天に間近く

木葉木菟逢ひたきひとは皆あちら

汗手貫せる僧にうっとり

白秋の二番目の妻去りし謎

小豆粥炊き塗椀に盛る

ポルシェにて息子がふいにUターン

ブリキのおもちゃ今ぢやお宝

夕月に初体験の蝗とり

ナウ

十字架祭で唱ふ賛美歌

爽やかに山の出湯のクラス会

あなたのほくろまだ健在ね

みちのくの不動産王いま何処

藍染の甕でんと置かれる

芥川花びら流れ龍の図に

風船に乗り宙を行く夢

平成十二年六月二十一日 首尾

於 清澄庭園

代 麻 郁 樹 津 郁 志 麻 代 同 麻 津 郁 麻 志 津 樹 志

昼寝人

いつよりぞ地球は丸し昼寝人

風鈴草に風のちりちり

点々と片側町に灯ともりて

野球帰りの少年と月

宿題は二百十日に完了し

炭火おこして秋刀魚焼くなり

あこがれの河童住む郷行き行きぬ^ウ

港に出れば恋の真似事

まっ青にリトマス液は変色し

あの真夏日の太鼓打つ腕

吾が家の前手を振って選挙カー

卵雑炊ふるまつてをり

バンソリの聞こえる村に月凍し^{*}

杖消す奇術みんな飽きてる

むかうまで透けて見えさう万華鏡

阿蘇の煙も有珠の煙も

ひとつもとの神代桜花爛漫

祖父の庭には猫が生まれて

浅賀 淑代 捌

浅賀 淑代

坂本 統一

菅原 紀彦

棚町 未悠

太田 けんのすけ

中井 しずお

一 け彦

お彦

お彦

同代

悠彦

お彦

一 け

代

一 け

代

一 け

代

ナオ

永日を持ち株数へ終はらずや

己の高さ知らぬ雲雀よ

I Qの水増しをして入信し

ヒッチハイクの茶髪銀髪

大西洋独りヨットを走らせて

妙に利発な王の落胤

後宮の美女三千に靴を給ふ

つい口衝いてありんすの語尾

ばったりと荒ぶる牛の倒れたり

ヘミングウェイの若き肖像

月昇る地の果海の断崖に

眠る珍陀酒に稲妻の邑

オウ

風炉名残嫗らゆるり語り合ふ

出前迅速かしぐ岡持

旋回は低く大きくプロペラ機

生老病死意のままになる

きのふけふ花前線を待ち惚け

お遍路さんが肩を寄せゆく

*近世朝鮮の庶民の文芸。節を付けて演唱する。

平成十二年六月十八日
於　ベルブ永山

彦 け 彦 悠 一 悠 彦 け 彦 悠 一 彦 け 彦 悠 一 彦 け 彦

ナオ

出替りで懐かしき人めぐり来る

秋田訛で話す垢舐

軋みつつはめ殺し窓風に鳴り

たたけば沈む瓶の才牙

似た声の父と倅を間違へて

暗闇で嗅ぐ匂ひ怪しげ

いつだって自分一人が頼りなの

演技派なれば稽古大事に

白足袋を裏にかへして吊す癖

コンクリートの腐食はげしく

濤に向くクロンボー城月を浴び

詩をくちずさむや、寒の頃

ナウ

赤梨の長十郎と言ふが好き

教頭先生畏みて礼

若者のファッション飛んでも驚かず

夢のどらかに金婚の式

四・五日は花に狂ひてゐたりけり

春の疾風のぬけてゆく街

平成十二年八月三日 首尾
於 梶が谷房連庵

保 弘 和 麻 和 麻 弘 保 麻 和 保 弘 和 麻 弘 保 麻 和

蓑虫や

今宮 水壺 捌

蓑虫や思ひ出したる忘れごと

こぼるる萩に遊ぶ月影

運動会白きラインを引き終へて

何と大きな母のおむすび

ゆつくりと高層街の流れ雲

暑い窓辺でギター爪弾く

揚^ウ花火老いも若きも江戸風に

すれ違ひざまちよつと流し目

あの男何ほのもんやよしなはれ

漫画本売る二束三文

禁煙のホームページに加はつて

同病同室百年の知己

雪雲の霽れてまんまる軒の月

寒行僧のひたひたと行く

シャガールもダリも現の夢を生き

埴輪のやうなのどらかな笑み

里桜秩父古町瀬に沿ひ

抱く仔猫の機嫌上々

今宮 水壺
長崎 和子
倉本 路子
佐々木 有子

壺 代 子 路 代 有 代 路 代 有 路 同 代 路 有 代 路 代 有 路 代 路

別れ鴉

内田 麻子 捌

数日を別れ鴉か鳴き交す

ホームに立ちて仰ぐ月影

木犀の香りまつはる宵ならん

図鑑並べる居間の本棚

麵棒をたてて延してパイの生地

テレビに夢中五輪サッカー

冬^ウ帽子目深にかぶり叔父が来る

皮の鞆は頭文字入り

あの人是一流が好き恋人も

みんないやいやかぐや姫なら

理想郷ニライカナイは海の果

うすむらさきの水母漂ふ

月洩るる夜店に駄菓子商ひて

「ひ」と「し」の区別つかぬお育ち

鷺堂流仮名もじ習ふお下げ髪

ナイキシューズでベダル踏み込む

街川の水面に浮かぶ万の花

昔若鮎来たる辺りの

内田 麻子
斎藤 久美子
高瀬 美保
市野沢 弘子
八角 澄子
五味 蓉子
杉崎 雅子
橘 朱鷺子

保 蓉 鷺 澄 弘 鷺 美 鷺 保 雅

ナオ

春雷に遺伝子解説はかどらず

凹面鏡を覗く園児等

モナコにて当りに当るルーレット

深きスリットちらちらと見せ

しとねから敷きつめた薔薇こぼれ落ち

扉を開く時計人形

手作りの果実酒琥珀の色沈め

こそ泥捕へ威張る寺守

リストラに貧乏神が付きまとひ

大江戸線が繋ぐ南北

月皎々坂のほり行きくだり行き

そぞろ寒きにきざす腰痛

ナウ

蟋蟀の籠を宝に孫眠る

三色ボール廻るバーバー

BGMいつもの曲を聴いてをり

朝寝の象の起こされて居る

先がけて河津桜の花の濃き

町おこしとて売らる草餅

平成十二年九月二十八日 首尾
於 梶が谷房連庵

保 蓉 澄 弘 美 鷺 蓉 美 蓉 保 蓉 鷺 澄 弘 美 蓉 保 蓉 雅 麻 雅 弘

古 雛

加藤 道子 捌

遠目なる骨董店の古雛

亀も泣くかや庇深々

酢茎菜の大き石吊る桶ならん

細き流れに浸す指先

厚底の靴の集団月揺らす

ノルマ残して赤い羽根売り

愛犬は素早く木の实受け止めて

男選びに効かす臭覚

憧れの女への梯子外すとき

DNAのせいにするまい

麻雀の賭に図書券あるかしら

止まらぬ汗をふいて説明

月縫って声と姿の仏法僧

酒は二合半こなから録音はON

リニユアール演歌流れて大ヒット

ひとごみの中孫を探さん

花曇り踏み止まって生きめやも

手甲脚絆お四国に出る

加藤 道子
式田 和子
蒲原 志げ子
橘 文子
本田 弥生
田野 満子
橋野 代々子

文 代 和 げ 生 代 和 代 生 和 文

ナオ
師の慕ふ師の顔知らず春の雪

地訛り激し喧嘩成敗

しれこへ
髑髏コンドルの舞ふ深き溪

オカリナ窯に残る冬虫

大鍋のけんちん汁を取り分けて

惚れたら盛りをちよつと良くする

「出来ちゃった」声の小さき裏の木戸

国境越せばゴミ捨つる汽車

マラソンの杵を役員しほりあげ

創作の染彩の爽やか

豊太閤月見なしたる楼に佇つ

冷まじきもの宵の金策

ナウ
一浪も二浪もなにさ夢を追へ

夏季講習に爺さま皆勤

綾取りの山から橋を受け渡し

磨き込まれし縁のささくれ

飛鳥路の礎石に花の降りそそぎ

眠り覚ましたやんちゃ佐保姫

平成十二年三月一日 首尾
於 鎌倉おんめ様

満 道 生 代 満 道 満 同 文 和 文 げ 和 生 げ 満 代 げ

穂薄の

金久保淑子 捌

穂薄の風のながれに逆らはす

湖の端よりゆらり初月

赤い羽根少女等声を揃へゐて

駆け込む駅に発車ベル鳴る

弟子入りの許可をいただく幸に

鯉のあらひの染付けの皿

勢ひたつ神田祭のお先棒^ウ

卷上髪のあの娘どこの娘

色話女系家族に絶間なく

当ててためして鎌の切れ味

原潜の事故には触れず大統領

地下のマグマの動き終息

月の窓浅間はすでに雪を被て

火熨斗十能母の俤

目鼻耳齒に神経と医者通ひ

聞けば答を返すロボット

花盛りサルサで踊るスパニッシュ

ほそめに開ける春の障子戸

金久保淑子

篠原達子

倉本路子

蒲原志げ子

豊田好敏

路敏

敏

路敏

敏

路敏

敏

路敏

敏

路敏

敏

路敏

敏

路敏

ナオ

お蚕さまは妃殿下お手飼「小石丸」

紅茶いただく午後のひととき

パソコンを習ふに遅き年であり

晴のち曇そして大雨

蚊遣火を腰にぶらさげ肝だめし

干した布海苔はちりりちりめん

釣り上げし人魚に恋す老漁師

バイアグラにてつぶす身代

墓石へそそぐ純米吟醸酒

生々流転描く大観

陰笛に月澄み渡り夢のごと

ナウ
馬曳き帰る曲家の秋

新蕎麦を打つ間もどかし相撲部屋

チャーター便でブラジルへ飛ぶ

海賊の裔に貴族のサーがつき

飲めや歌へや二世誕生

よくしゃべるインコも交へ花筵

土手にちろちろ揺れる陽炎

平成十二年八月二十五日 首尾

於 新宿角筈地域センター

達 路 げ 達 げ 敏 同 路 同 淑 げ 達 敏 達 敏 達 淑 げ

遅るとも

遅るとも一雨ごとの紅葉かな

雲間に現れし月の細眉

炉火恋しレターペーパー引き寄せて

猫ものばかり部屋にあふれる

泳ぎ終へ兎ら分乗の車行き

コーラサイダーアイスキャンデー

撮影所跡地に佇ちて澄ます耳

真知子巻して君の名を問ひ

我が亭主何しておはすニューヨーク

携帯電話無人島にも

冒険譚次第次第にふくらんで

しなやか目指す知事の誕生

梟の首はぐるとひとまとまり

癲狂院の屋根に凍月

赤貧と憂国の祖父像となり

TO TOで当てたよ億万長者

菰かぶり木槌にかかる花吹雪

歓迎されて蝶とひよっこ

蒲原志げ子 捌

蒲原志げ子

本田弥生

橘朱鷺子

山本要子

橋野代々子

田村満子

鷺要子

代鷺

同満

生鷺

満鷺

代満

満鷺

鷺満

鷺満

鷺満

鷺満

鷺満

ナオ

あんころ餅土産に買つて伊勢参り

生保破綻で右往左往し

出口なき樹海に警官見たものは

写真供養と寺の広告

方丈さん碧い眼聚る汗ざんざ

蘭鑄の鰐妖し後朝

火宅へは帰る道なき戻り橋

塵芥の置き場に厚き座布団

雑巾掛け知らぬ内弟子大卒で

寝方さまざま終電の席

朝月夜羽衣の松波しづか

老舗の湯宿冬支度する

オウ
ギター弾く軍服古びそぞろ寒

タンゴステップ間違へちやつた

熟年に百名山は夢の夢

丈夫なものは脚と前歯よ

独り立つ大樹の花に息をのみ

ジーワジーワと春蟬のなく

平成十二年十一月一日 首尾
於 鎌倉おんめ様

生 要 代 鷺 生 同 要 代 同 要 満 生 げ 満

ナオ

春スキーいつきにシャンツエ滑り降り

リッチな友の誘ふ別荘

頭取の余技は南京玉すだれ

心療内科予約いっぱい

冬眠の墓に当たりし鍬の先

けふの闇汁欠席にする

不信任陣笠どもを燻り出し

幾久しくとついた三つ指

乱れ髪この世のものと思はれず

にっちもさっちもゆかぬファスナー

マラッカの海賊船に月昇り

ナウ 照準びたと合はすうそ寒

秋深む自費出版の本が売れ

楊枝くはへて釣りは取つとけ

バスポート十年ものに書き替へて

電話はまたもエステ勧誘

加賀紋の色はんなりと花衣

爺のほろ酔暮れかぬる道

平成十二年十一月十八日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

二 靖 郎 代 郎 巳 代 二 靖 敬 二 泉 巳 代 靖 路 泉

体内レンズ

権頭 和弥 捌

青梅雨や体内レンズ馴染みそむ

公園の滝めぐるこゑごゑ

山かげの裾野は遠き異国にて

手慰みなるカード占ふ

旧みちの一部始終を月清か

柿を樹で売る造成の街

秋^ウまつり客の貌みて鮎にぎる

断り切れぬ胸の高鳴り

食薄くせよとつれなき美男医師

千葉ず選手五輪危ふし

しのび寄る中露北鮮いかならん

小銭せびらる旅の観光

冬の月納骨堂は四階で

化野あたり雪やこんこん

強面の猫にたちろぐ縫ひぐるみ

恵比寿大黒福呼び来たる

默然と俳諧師われ花の下

団扇作りを覗くアングル

安藤 八木郎
権頭 和弥
広橋 常昭
清野 茆子

弥子郎 昭子郎 弥子郎 昭子郎 弥子郎 昭子郎 弥子郎 昭子郎 弥子郎 昭子郎

ナオ

いざ行かんセール拵けて春の海

干さるる網に犬と戯むる

方言の通訳たてて土産店

やたらと広いだけの建物

初夏のバーゲン脚を棒にして

下着山積み汗の洗濯

軽やかに小娘こなす掘削機

いやいやいやああらあらあら

影ふたつひとつになりて動かざる

投げ爪磨く忍びくの一

破れ舟に月のつそりと望の潮

とばりの揺れて蚯蚓鳴くなり

帰農して落穂拾ひを樂しめり

やがてしづかに夢の眠りへ

何事ぞ窓直撃の列車音

佃煮横丁けふもカメリハ

野を丘に花を追ひつつ古希の坂

盃に盛る庭の囀り

平成十二年六月三十日 起首

於 後樂園あと文音

平成十二年八月三十日 満尾

子 昭 弥 郎 昭 子 郎 子 弥 昭 弥 郎 昭 子 郎 弥 子 昭

膳所の辺り

失くせしは膳所の辺りか冬帽子

紅葉散り寄すさざ波の岸

二楽章ピアノの調べ長調に

生クリームは七分泡立つ

月の客招きし窓の広々と

し南どんと据ゑられ

ハロウインのお化けワゴンで運びくる

皆ひそひそとこの町の人

独身はただいい奴がゐないだけ

美女の誇りにちよつとてこずり

纏はるる熟鮭の香か月の宿

じゅういちじゅういちばくち鳥鳴く

その筋の株上場も御時世で

てばなし難き焼斑の鉢

韓国の南原ナムソンより来て名家なる

出湯にゆつたり採ます足腰

選ばれし一日巫女の花鎮め

松蟬生るる雨後の黒土

坂本 孝子 捌

坂本孝子
大窪瑞枝
鈴木美奈子
日高玲
佐古英子
倉本路子

子路英奈玲枝路英枝路枝路奈玲

ナオ

火を噴いて無人となりし島の春

稚児の噓も票の数なり

希望せぬ希望退職年の坂

ON対決夫と対決

仏壇の弥陀に悋気を預け置き

酒のみながら待つてゐる背

脱ぐときの恥らひはあり男にも

迂回して出る西口の地下

搭乗券エコノミーよりなほ安く

革命は夢手錠掲げて

主なき軍靴に飾れ花芒

ナウ

キリエイソン月光の弥撒

どさんこの蟹洗ふ初嵐

五百円玉返す自販機

文明の二十世紀に棲み馴れて

屏風に張りし古き丸帯

見得を切る役者冥利よ花吹雪

柝の音長閑に終る昼の部

平成十二年十一月十日 首尾

於 俳句文学館

路 枝 奈 路 奈 枝 路 玲 英 玲 奈 枝 同 路 同 英 孝 英

秋 祭

秋祭「明治様」より八十年*

豆名月を送る松韻

裂膾海女の饒舌きりもなし

失せもの出てまた失せる頃

復刻の漫画全集完結す

冬の座敷に畳む卓袱台

空港に急ぐ寒靄立ちこめて

GIハット似合ふあの人

ガム捨ててキッスいつでもスタンバイ

ぼくはどこから生まれたのねえ

噴火口覗き見をする客のゐて

汗疹地蔵に置いた鑢びた銭

月あかりそこはかとなく薰衣香

教育県に新しき風

高速道拾のトンネル抜けてゆき

ペットと入るぬるき温泉

毒味役辞して仰げる花大樹

縁側で祖母しゃばんだま吹く

式田 和子 捌

式田和子
島村曉巳
和田順子
中野昌子
近藤守男
日高山志世子
秋山志世子
青木泉子

巳男玲巳順昌男玲泉世

ナオ

異教徒の停戦会議蟹気楼

かえって疲れるなにもない日は

一気飲みここで止めねばあの世ゆき

憑きもの落ちて細き汝が影

あぶな絵ではづす関節もの知らず

素肌きりりと透ける羅

ごみ袋都庁推薦大きすぎ

箒を捨てて魔女が手伝ふ

もくもくとバラリンピックの金メダル

無理に探した遠い親戚

古物商峠を抜けて月の宿

浮世の晩鐘黄落の中

ナウ
虫の音を脇にカードを切つてゐる

すぐに膨らむ故郷の餅

額ぶちの校長先生皆若く

問題児ほど巧いパソコン

少々は破れかぶれの花万朶

誕生の報轉りの中

*明治神宮八十年です。

平成十二年十月二十二日 首尾
於 NHK 青山荘

男 順 泉 玲 男 世 巳 昌 順 和 玲 同 男 順 昌 巳 和 世

暮早し 繁原 敏女 捌

暮早しわが生いつまでミレニアム

内玄関に匂う柊

酌み交わす漁師の声の高らかに

帽子ふりふり走る自転車

異人館尋ね迷いて処暑の月

丈より長し馬追の髭

秋風のめくるレシビの一ページ^ウ

サランラップでチンしたい恋

彼の名を付けた牡猫の背を撫でて

未練も少し離婚裁判

大都会川は流れて海に入り

泥棒市場チェンマイの壺

月涼し滅法強いおいちよかぶ

縮さっぱりすててこを穿き

永田町自自公と言う鳩の飛ぶ

ひいばあちゃんの髪はパープル

花万朶花の遺伝子研究所

ふらんこ揺らす昼のひととき

後藤東潮	黒木美代子	稲田千寿	由川慶子	間瀬扶美子	矢崎	繁原敏女	潮慶	代慶	美
------	-------	------	------	-------	----	------	----	----	---

ナキ

なんとなく間のびの銚山笑う

水たつぷりと段畑の堀

名にし負うイタリア男の浮気癖

故郷を捨てて君の虜に

木枯しに吹かるる木の葉何処迄も

ずわい蟹売る店先の湯気

舞の海小兵なれども光る技

四角い部屋を丸く掃きおり

性格を賞め合っている同窓会

明治大正昭和はるけし

ルナパークスローテンボのジャズ流れ

ヌーボー和むヴェネチアの杯

食卓に胡桃ころりところがして

碁仇負かす秘策あれこれ

軒先のとるてる坊主白み初む

チヨコを頒け合う遠足の子等

村里は夢のようなり花吹雪

溪の吊橋戯れの蝶

平成十一年十一月十六日 起首

平成十一年十二月二十五日 満尾

於 桜花学園大学

美 慶 潮 同 美 代 慶 美 慶 女 美 潮 代 慶 潮 女 寿 同

円の大小

てんたうの円の大小昼の月

弾むごとくに路地の裸子

気まま旅見知らぬ駅に降り立ちて

巨木の切手ワンシート買ひ

ケイタイをうまく使つてEメール

忘れしままの鴉の早贄

即習のおけさ踊で槽下^ウ

菊の香連れてとどく笛の音

磨かれし御堂の玻璃を月渡る

気配も見せず尼僧つけ文

後悔をさせぬが情人の掟なり

チンパンジーも左脳発達

中トロに行列も出る五番街

日本庭園畳替する

新曲はやけに休止が耳につく

総理大臣オフレコが好き

酔ふほどに花守りいよよ凜として

噴山越えて鳴帰る頃

島村 暁巳 捌

島村 暁巳

八代 嫺巳

日高 英二

竹田 登代子

神谷 安子

村田 富美

豊田 好敏

三木 俊子

美子

俊子

二美

美子

敏子

安子

二子

登子

嫺巳

登子

ナオ

荒布船鳴門の渦ものとせず

白づくめにて食べるおにぎり

細腰をひねって見せる楽屋裏

惚れた人にはスッピンで拗ね

はぐらかしはぐらかされる生き地獄

遅々と進まぬ夏の宿題

河童忌の受付今年も買ってで

ナスダックにもちよっと手を染め

遊び好き金の成る木を丹精し

うっかり医療の続く病院

月を背に朽たれ風車の巨き影

ギンガムチェック案山子まとへる

ナウ
稲掛けのかくれんぼこそ恋しけれ

ほろりと苦き喉ごしのお茶

人工湖ピラニアだけが殖え続け

借りたパターで取りしバーディー

夢果たし古刹の飛花の只中に

門前の宿蛙合戦

平成十二年七月十五日 起首ナウ二句目から文音
平成十二年八月三十一日 満尾
於 赤城社会教育会館

敏 媛 二 登 同 敏 媛 俊 媛 登 媛 二 安 富 敏 巳 俊

花火筒

花火筒ごろりと海の日を返す

ひと足ごとに走る船虫

麦酒乾す賑はひの中われもゐて

液晶テレビ色もあざやか

振付の着想を得る月影に

辞書さまざまに積んで夜学子

彫刻の森あり林檎の樹の向かふ

フリスビー飛びボイーター駆け

ポケットに溶け出してゐるチョコレート

趣味の探偵本職となる

聞くにつけ見るにつけても佳い女

デイトの最中大きくつまめ

凍てし月寺の大屋根さし登る

斑鳩の地に石工営み

エッシャーのだまし絵にまただまされて

ウォーキングで保つ健康

きらん草二十世紀のこの野辺に

蛙合戦故郷の池

下鉢 清子 捌

下 鉢 清 子
百 武 冬 乃
浅 賀 淑 代
若 松 英 香
日 高 二 乃

子 乃 代 香 二 同 子 香 代 乃 香 代 乃

ナオ

山羊の毛を刈る少年と無を論ず

原稿締切り記者が催促

マジックショーあらぬ方よりカード出て

親善大使西に東に

どしや降りを構はず單車走らせる

尺蠖虫の宙に浮く足

腸はらわたにすくと妻の一夜鮎

いらぬところに仲人が来た

ライン河左右に仰ぐ古き城

剥落しるき聖母子の像

皆既食しうゆせんべのやうな月

ジャックするする登る豆蔓

新札にやうやう馴染み爽やかにナウ

伝言板は判じ物めく

同窓会仇名幼な名呼び合つて

コーンパイプを銜へたる髭

思ひ立ち卑弥呼の村の花尋ね

ちよつとちよつとと誘ふ小綬鶏

平成十二年七月十九日 首尾
於 江東芭蕉記念館

代 香 乃 代 香 乃 代 香 乃 代 香 乃 代 香 乃 代 香 乃 代 香 乃

壬生狂言無言のシテの背に鉦

犯人ほしに好かれる名物刑事部長でかちよう

「ただいまあ」人なき家へ朝帰り

九官鳥の騒ぐ玄関

総立ちの終相場のウォール街

金の手袋飾るティファニー

受話器とり訛隠してお嬢さま

射止めし女にくるま名を付く

だしぬかれ頭中将ほぞを噛み

シュートの球のゴールすれすれ

御神木亀裂あらはに月渉る

峨々と鎮もる秋の山稜

ナウ
髪形は喜寿も傘寿もシャンピニオン*

貸しビデオ屋のカード三枚

「格子なき牢獄」だつたと戦中派

源流尋ね単線で行く

ひょうたんを小枝に結び宇治の花

蕘を濡らす不意の淡雪

*マツシユルムのやうな髪形

平成十二年一月十二日 首尾

於新宿滝沢

碧奈こ奈こ碧こ碧奈碧奈こ碧奈こ碧こ同

小名木川

雁や潮の満ちくる小名木川
 キンモクセイの香る夕月
 マンシヨンに簾をはづす人のゐて
 詰碁の筋のひよいと解けたる
 自転車をついで越ゆる歩道橋
 麦稈帽子誰が忘れし
 黒ゴマのソフトクリーム看板に
 意地悪さうで親切なひと
 恋愛の七つ道具の頭陀袋
 国勢調査に書けぬ関係
 ビーポー車真似ずにをれぬうちの犬
 ぶっかけめしが大の好物
 月寒し旅鞆まだそのままに
 ロンドン氷雨パリ薄曇り
 寄合ひのそれは自前か付け髭か
 目にもとまらぬ手品師の技
 紙コップ転げ出でたる花の中
 仔馬あと追ふ輓馬競走

染谷佳之子 捌

染谷佳之子
 篠原達子
 登坂かりん
 今宮水壺
 山本千代子
 倉本路子
 佐々木有子
 千有子
 達有子
 ん
 達有子
 ん
 路有子
 達有子
 壺有子
 有子
 千有子
 達有子

代々の家業は団扇作りにて^{ナオ}

野沢菜は「菜」と言へばことたる

会社では肩書家ぢやただの餓鬼

百円シヨップすべてあります

どうしても傾きたがる弥次郎兵衛

村の祭で酌み交はす酒

天瓜粉まき散らかして逃げだす児

親指出して首横に振り

錫婚のたまには欲しい変化球

くはへ煙草の火を点けぬまま

中東に止まぬ争ひ月渡る

ふんころがしをとばす秋風

大根蒔く運の悪さをかこちつつ^{ナウ}

遠赤外線当てる足裏

夢に見し二死満塁のホームラン

ブックバンドもブランドでなきや

花の宴魔女の仮装でくり出して

笑ふ山より昇る噴煙

平成十二年十月三十一日 首尾

於 大久保地域センター

壺 路 同 有 壺 千 達 有 壺 之 達 有 壺 之 有 千 之

定家忌や

定家忌や万年筆の文とどく

恋しきひとを想ふ名月

初秋刀魚かんできの火に焼き上げて

陶器作りも煉りが肝腎

なだらかな稜線著く続きをり

立夏の頃の気持良き風

マ^ッラソンの練習汗の五十キロ

喘息の子の祈る韋駄天

折紙をちゃんと教へる祖母の膝

他人の最中を見れば大きく

公園にデビューの犬のきよろきよろと

レンブランドの確かなる線

凍てし月裁判官を引退す

妻と寝酒を酌み交す夜々

モノクロのカサブランカ観に行きたいね

ジャズのピアノに心溶かされ

風の中花の一片掌に受けて

蝶舞ひ立てる土堤の明るさ

橘 朱鷺子 捌

橘 朱鷺子

鈴木 千恵子

東 明雅

根津 忠史

関口 靖子

同 雅

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

千 史

ナオ

見物もみんな眠たき大念仏

行列あればすぐ後につき

ミレニアム欧州巡る夢の旅

ドラキュラの棲む城の蝙蝠

外套の下に燃えたる緋の情こころ

革命遠く君は故郷に

返還の筈の四島ありありと

お代りをする機内サービス

子どもにせかれ始むる月の宴

薄紅葉せる庭の静けさ

やや寒に頬つき合せ何話す

ATMで済ます送金

ナウ

お父様暫く御無沙汰しました

籠の鸚鵡が日毎繰言

自らも鎮もつてくれ浅間山

禁煙タイム身につかぬまま

花守の真正の花咲かせ継ぐ

漫画劇画とのどらかな昼

平成十二年十月一日 首尾
於 深川芭蕉記念館

雅 由 千 同 由 史 千 雅 同 史 靖 同 由 雅 史 同 朱 靖

そうめん だし
索麵の出汁

索麵の出汁澄みにけり暮の春

つばみ紅増す山笑ふ中

はしゃぐ子は叱られつつもうららかに

明日の茶会の着物選ばむ

碧い眼の客迎へして望の月

まるめろの実の香りひろがる

湯^ウ上がりの風心地よく虫すだき

猪口も男も変へる楽しみ

残業と嘘のいろいろ恋の技

予定日も過ぎ萎むした腹

てやんでえ長屋の熊は啖呵きり

煤払ひするパリの裏街

月冴ゆるロマネコンティの初句会

向かひに座るへんな小父さん

これからは共産党がのさばるか

胸いっぱい吹いた尺八

花守の苦勞偲はる瀧桜

増坊の屋根かげろひの立つ

豊田 好敏 捌

高橋 豊美

古賀 一郎

豊田 好敏

山田 美代子

青木 泉子

山本 要子

郎 美

代 敏

要 泉

美 希

郎 敏

代 泉

上 山 由

山 由

郎 敏

代 泉

泉 代

泉 代

ナオ

めかりどきアクアビクスでダイエット

ジャンボマックを二つ注文

定宿の北京飯店古稀迎へ

地獄の底でうめく曹長

最善をつくした後の神だのみ

卵残して帰る海亀

公園の野外演奏ひと集ひ

パイア売りの少女はにかむ

ガジユマルにハートマークを彫り込みて

別れも告げず入る僧院

熟れすぎし玉蜀黍を照らす月

ナウ

安達良山を雁の越へ行く

運動会プラスバンドの元氣よく

藩校祝ふ二百年なる

火縄銃使へるほどに腕あげて

夢を托した仔馬流星

群をなす人力タクシー花の中

国宝展を巡る永日

平成十二年四月十五日 首尾
於 三春 ぬる湯旅館

要美郎敏代 泉美郎敏代 泉美希代 泉美郎敏希 泉美希

ナ
婆様の天皇暗誦目借時

降圧剤はさゆをさまして

旅立を指をりかぞへ煙草断つ

男ばかりのバレ―団来る

白鳥にくつきりとある喉仏

初嫁見れば追へる生はげ

寝乱れし衿かき合はせ然らぬ体

燃えぬごみまで紙の袋に

ベトナムの料理のレシピ大当たり

ルーキーディフェンス逆転を決め

山の端に育ち始むる月ならん

震災の忌に供ふおもたせ

ナ
職退きて弟子入りしたる松手入

預金残高ぐんと目減りす

銘柄を選ぶ楽しみ酒売場

夢に出て来る故郷の家

花筏静かに分けて竿の先

しだるる枝に憩ふてふてふ

平成十二年一月二十六日 首尾

於 東京ウィメンズプラザ

利 嬭 時 恵 碧 利 嬭 同 碧 同 嬭 同 利 恵 碧 代 時

水の香や

水の香や色なき風の翁庵

世紀末なる今宵望月

草泊國名クイズきりもなし

地理に詳しいパパは得意気

抽象の大作壁を圧倒し

予算説明汗をふきふき

TV局メイクのおじさん三尺寝

元をたどれば何の某

相性が良しと思ふは後の事

ハシブトガラス阿呆阿呆と

海底にナチス財宝探すらん

針葉樹林凍つる鼻先

冬の月長々とあり破れし馬塞^{ませ}

十字架並ぶ無牧教会

北の旅同級の友賑やかに

飲めぬ呑めぬがいつまでも呑み

踏み脱いで差す手引く手の花衣

からくり時計囀の中

中田あかり 捌

中田あかり
東 郁子
島 村 暁 巳
若 林 文 伸
山 口 美 恵

恵 巳 伸 子 恵 伸 同 子 恵 巳 同

江の島や

橋野代々子 捌

江の島や岩壁の猫月に跳ぶ
 新涼の風はこぶ白波
 障子貼る男組にも割り振りて
 鼻唄のでる長きジープ
 広報車巡回終へて速度上げ
 いちご数粒熟るる鉢植
 尼寺に名士の記帳夏炉焚く
 恋知り初めし旅の少年
 愛らしい顔してちよつと嘘をつき
 靴を脱いでも痛む魚の目
 北領に倭名戻るを願へども
 株の運用リスク伴ふ
 熱燗と内緒話の尽きぬ月
 火事だ火事だぞ退いてくんねへ
 宅配のピザのチーズの溶けかかり
 区画こまかに土地の分譲
 しばらくは心あづけむけふの花
 マラソンの列過ぎるのどらか

満	志	生	要	和	同	朱	子	和	志	朱	生	生	子	弥	田	本	山	蒲	式	橘	橋
															村	田	本	原	田	野	代々子
															満	弥	要	志	和	朱	朱

ナオ

薄様に透けし古雛の面寂びて

技盗みつつ砥修業せり

宝石の通も迷ひぬ贗の石

生鮮品に産地表示す

馭すは彼モンゴルの虹馳せぬける

汗も胸毛もただ慕はしき

拭き込んだ廊下の艶も半世紀

IT音痴は過去の生きもの

乾咳のエヘンエヘンでごまかされ

そつと食うてる菜虫芋虫

月著し塵を払ひて雨一過

馴染みの尾根を下る漸寒

被写体は鳩に餌を撒く子供達

表情ゆたか手話も交へて

「最初はぐう」負けて許りの皿洗ひ

日永の庭にカプチーノ淹れ

花匂ふビルのあはひに道祖神

街の賑はひ包む春色

平成十二年九月六日 首尾

於 鎌倉おんめ様

和代要 生要 生和 志満 同 和代 生満 志要 代要

良夜かな

吟詠の窓辺明るき良夜かな

父の丹精匂ひ立つ蘭

くりかへし秋の潮のうねるらん

右へ左へまはす地球儀

たかんなの皮ぬぐ藪を通り抜け

オーブンカーに犬も乗せられ

君が代と日の丸滲む表彰台^ウ

高橋尚子やはらかな笑み

妖刀の刃のこぼれたる閨の内

SLの笛びーとふるはせ

安楽椅子寢息静かに洩れ始め

骨折といふ不意の難儀が

月光に一喝されし臘八会

松葉の酒をまはし飲みして

地下室のボーカルフエイスチエスの牌

落とし穴ある遊歩道なり

持寄の花見弁当母の昼

眼鏡の奥のひとみあたたか

長谷川芳子 捌

長谷川 芳子

細川 研三

杉山 壽子

山田 歌子

三 芳 壽 歌 芳 三 歌 壽 三 芳 壽 歌 芳 三 子

ナオ

画用紙つなぎクレヨンの橋

美容室色きめかねるおしやれ染

出過ぎた釘を斜め打ち込み

蚤しらみ這ひ出てきたり野党陣

穂高山荘雑魚寝から覚め

ときどきとハートのすみで非常ベル

体育系の彼がキャッチし

強引にひと味変へる匙加減

慣れたはずでも時差ぼけとなる

月に見る世上の業を誇りゐて

新走りにはならぬ堪忍

ナウ

困つたやうな祖母の顔見え

さあ行こうブリリアントな未来都市

美術館にはエスカレーター

平安の牛車の軋み花朧

ふらここの揺れ夢を誘へる

平成十二年九月二十七日 起首

於山田歌子宅

壽 歌

武村利子

宮川侑子

青島ゆみを

中 森 美保子

書

く
の
あ
や

歌

僦

を

和

端

僦

を

壽

歌

僦

紅梅や

米寿を祝して

紅梅やモガは米寿となり給ひ

よくぞ生きたと笑ふ山々

蝶の来てひらりと止る肩の辺に

陽のうつろへる天鷲絨の椅子

月上るヴィオラの響いづこより

長くつづけて梨の皮をむく

妖怪の出番待つてゐる聖徒祭

アンクレットの脚のしなやか

ウイウイを教へただけの異邦人

赤信号の続く交差路

縁起よし蛇の脱殻お守りに

インターネットで株の売買

助教授のゼミは熱爛囲む月

おろしや帰りの話身に凍む

流れきて河口の水のゆるやかに

何を啄ばむ鳩も鴉も

存分に花浴びし服愛ほしく

戯れに描く似顔のどらか

八角澄子捌

八角澄子

山口みづゑ

五味蓉子

椿紀子

斎藤久美子

内田麻子

岩田玲子

上月淳子

式田和子

高瀬美保

市野弘子

橘文子

同

和

保

弘

ゑ

文

焙炉場の三日坊主の見習生

煙草の匂ひとれぬ中古車

新聞を見るのが怖い署長妻

もうよからうと蜥蜴ひよつこり

検校の暑氣払ひには欠け土瓶

秘薬は後向いてたらすの

身八つからはみだすほどの巨乳なる

共白髪までいろいろな道

自分史は半ばほどにて匙を投げ

野茂の先発日本人初

端正な月おろがまむ願かけて

藁塚のあなたに禅寺の塔

失せもののやうやく出でし蔓たぐり

犬と一緒に通ふ図書館

反り返りひざまづいてるヨーガ術

小学生はデジカメが好き

海峡を更に越えゆく花筏

魚の涙も春の景物

平成十二年三月二十三日 首尾

於 武蔵溝の口高津市民館

執筆 澄保弘 系 保弘 和文 系 弘同 和文 系 保文 和

ハムラビの刻文

原田 千町 捌

ハムラビの刻文黒き残暑かな

靴音響く月の回廊

片襷落ち鮎の串焼くならん

伝票立ては吾子の手作り

パソコンのニュース速報チェックして

轍くつきり散水車行く

^ウ初っ切りの愛嬌はどこ夏の場合

大食漢の彼とブランチ

旅鞆秘めごとなども詰めながら

梨園の妻は常に気遣ひ

*とうらごの肥えて味ます浜に月

毛布の山を分ける避難所

列島に狂へるマグマ撮りまくる

馬面が抱く胴長の犬

またしても写楽誰かの議論出て

唐の墨磨る端溪の海

大神宮盛りの花に鎮もりぬ

蜜を集めて巣に帰る蜂

原田 千町
中 林 あや
橋 野 代々子
小 池 啓子
井 上 蘭 石

代 同 蘭 啓 あ 代 啓 蘭 啓 あ 蘭 同 代 石

ナオ

春深くスコアー一枚見つからず

玩具の病院勘で治せり

占ひの母の言葉を秘めし胸

農業大学酒も造らせ

寮生の裸踊りと肝試し

噴水浴びつ戯れのキッス

嘘つきになつて貴方のものになる

ぐらりと傾ぐ人形の首

無住寺の縛られ地藏凍つる鐘

介護ホームの伯父を見舞に

十三夜どつと笑ひの湧く落語

最優勝の南瓜SL

ナウ

そぞろ寒姉は寡黙にダイエット

亀の子たわし主婦の発明

往年の名画衛星放送で

襦袢を干せば巣構への鳥

散る花に歌心ありちららちら

赤繪小鉢の中は酔海雲

*とらご……海鼠

平成十二年九月三日 首尾

於 芭蕉記念館

執筆 千 啓 蘭 代 啓 あ 代 啓 代 同 蘭 啓 蘭 啓 同 代 あ

冬野 日高 英二 捌

やはらかきもの孕みある冬野かな

石がつぶやく綿虫の昼

手際よく釜の姥口拭ひゐて

箸が滑れば可笑しくもあり

シャッターの音響きをり寝待月

時間どほりに顔をだす猪

壬^ウ生浪と蔑まれても爽やかに

おふひ紐にてくくる母無し

十字架に姦淫せぬと誓ひ合ひ

ヒールの底を鳩が見つめる

代役を立てて落着く楽屋口

公衆電話のつりは戻らず

徴兵の報せくる日の日雷

箱庭のごと瀬戸の町々

猫捕りの弁当につくワンカップ

トラウマ「シカト」何処より来る

花の雨晴のち曇り月おぼろ

春炬燵なほ仕舞ひかねたり

日 菅 福 浅 佛 日
高 原 原 賀 渕 高
英 紀 千 淑 健

二 晴 玲 悟 代 悟 同 彦 代 晴 玲 悟 二 彦 晴 代 悟 玲

ナオ

掌に眠蚕を転がすピアニツシモ

大統領は占ひに凝り

黒塗のくるま全員黒づくめ

傘がないからパンが買へない

君を恋ふ歌を束ねるホッチキス

嘘つき直れと籠もる禪寺

火の用心拍子木うつも奉仕の子

分別ゴミで拾ふなべかま

スベードのジャックが来ればフルハウス

委員長には疣の大将

七面鳥じつくり燻す月の宴

ナウ
さんさ踊をバンジョーで弾く

離陸する多面鏡体草もみぢ

重力異常かの横丁に

剃らないと決めた頬髭剃つてゐる

開高流に自分史を書く

釣舟の入江にも寄る花いかな

旅の鞆に笑まふ土雛

平成十二年十一月二十二日 首尾

於 世田谷梅ヶ丘 星辰堂

玲彦晴代悟二晴彦悟二代悟二晴彦悟二代悟二晴彦悟二

夏の庭

水門をくぐる燕や夏の庭

道しるべする白き十葉

取材記者IDカード吊り下げて

聞き取りにくい同時通訳

野分だつ雲押し分ける月の影

障子さつちり張り替へる父

運動会前へ前へと席を取り

ほじくつてゐるあんぱんのへそ

ガングロの化粧落とせばはにかみて

巴里はスイスと彼に教はる

先生に守り役もある選挙戦

英英辞書を引き悩む夜

つちのこは見つけぬがよし凍つる月

北行く列車ストーブを焚く

立ち喰ひにこだはるB級グルメなり

足の魚の目痛みだす頃

卓球台飛び交ふ球に花の降る

春のジャンパープレゼントされ

日高

玲 捌

日 高 玲

式 田 和 子

橋 朱鷺子

吉 村 ゑみこ

八 角 澄 子

高 橋 豊 美

和 美

こ 美

美 鷺

澄 鷺

同 鷺

和 同

こ 澄

澄 和

こ 澄

こ 澄

澄 和

和 澄

ナオ

教会の若芝を刈る子供たち

夢の世界を描く老画家

裏表帳簿合せも忙しく

こたへられない昼寝冷酒

銀蠅のやうな男につい惚れて

着せた着物は左前なり

道説きし孔子の墓の草も枯れ

十七歳の口は重たし

憧れのトライアスロン名を上げん

漂流物を拾ひたる浜

大いなる月へ向へる遣唐使

今年煙草で先づは一服

横丁の隠居が主役海羸廻し

総後架とは斯くなるものぞ

がらくたは木箱の中の宝物

地虫穴を出ちよつと挨拶

風狂の魔心に惹かれ花の山

忘我一刻佐保姫の舞

平成十二年六月二十一日 首尾

於 清澄庭園

美 玲 和 澄 鷺 こ 和 美 鷺 美 玲 鷺 和 こ 澄 こ 鷺 美

涅槃図に

佛 洌 健 悟 捌

涅槃図に猫も入れたり山の寺^{*}
 野焼の煙に風の道見え
 ライダーは弥生の望を待ちをりて
 鈍く反射す腰の鍵束
 五ツ玉重き算盤手に馴染み
 書斎の隅はかびの充滿
 夏雲^ウはビル鏡面を流れゆき
 都に迷ふいなか者なり
 裏路の Pasta 料理を梯子して
 ペアールツクの帽を目深に
 いつよりか仮の名で逢ふときめきも
 一日雌を追つてゐる鳩
 観覧車ゆらりと停まる宵の月
 何も見えない大芒原
 虫の音に生卵割りあぐねをり
 こむら返りも芸当のうち
 花爛漫あばれ天竜下るとき
 むすびに添へる目刺蜂の仔

佛	洌	健	悟	捌	佛	洌	健	悟	捌
近	藤	山	潤	子	近	藤	山	潤	子
浅	賀	淑	代		浅	賀	淑	代	
日	高		玲		日	高		玲	
橘		文	子		橘		文	子	
根	津	芙	紗		根	津	芙	紗	
倉	本	み	ち	こ	倉	本	み	ち	こ
倉	沢	友	子		倉	沢	友	子	
日	高	英	二		日	高	英	二	
軍	司	路	子		軍	司	路	子	

二 同 代 路 潤 玲 み 文

ナオ

アルバムに十六の母鳥曇

羽織袴は別々に持ち

蔵元のこだはり銘酒大樽に

SP盤のモーツァルトかけ

ぼくはただ先輩の道踏んただけ

飛距離も伸びて引き締まる顔

砂日傘妃殿下の手を取るは誰

恋の極意は押しといふけど

神の声生まぬつもりの子が生まれ

戸別訪問いつも連れ立ち

ぐうちよきばあぐうちよきばあと月渡る

高得点を貰ふ糸瓜忌

ナウ
けいとうの十四五本に律一人

右横書きの薬看板

カモミールティーで染めたる紙レース

少女の輪舞まなうらに揺れ

此の花や明日は会はれぬ花なれば

亀鳴くこゑを待つといふ人

* 芦丈翁の菩提寺長桂寺には、猫も描きこまれた珍しい涅槃図がある。

み 悟 潤 玲 文 潤 悟 友 路 友 み 代 二 紗 同 文 紗 潤

平成十二年三月八日 首尾
於 伊那市 芋庵

秋の気配

本田 弥生 捌

陶人形秋の気配を聞いてをり

小望月とて団子少々

布染めんくちなしの実を集めゐて

又置き忘る眼鏡ポシエット

誘ひ合ひ近郊の山歩く会

桑鷹^{いかるが}鳴きぬ四・六・二十四

海亀^ウが涙流しつ卵生む

星占ひで決める行く道

赤い糸つながる先が君だとは

携帯ならば出来る告白

オリンピックメダルをとればCMに

寒くなる頃届く通販

月の主迎ふ入側隙間風

大家さんにも訳ありと言ふ

聴かぬふり死んだふりする老の知恵

首の鈴ふり猫はアピール

ずいとして先づはひと差し花舞台

桜餅なら長命寺だよ

本田 弥生
式田 和子
橘野 代々子
蒲原 志げ子
田村 朱鷺子
満子

和 代 鷺 和 げ 満 げ 満 和 代 鷺 げ

ナオ

園児等と日永スケッチきりもなし

どんどん深く潜る地下鉄

地震計当てにならぬと鯰飼ふ

喧嘩御輿をかつぐ宵宮

薦被り誰も吞まぬに半分に

集合写真ひとり多くて

言ひ寄りしイタリア男髭つ面

ピルケース持ち準備完了

愛あれば財産なんかめじゃないわ

からんだ蔦をばつさりと切る

桧枝岐溪谷照らす月皓々

邯鄲の声夢の間にさへ

我々^{ナウ}はたどれば同じヒトゲノム

入れ歯出っ歯はご先祖のせい

若者の浪漫求め万華鏡

故郷離れ既に幾年

匂ひつつ花びら落ちる文庫本

フジ子ヘミングピアノウラらか

平成十二年十月四日 首尾
於 鎌倉おんめ様

満 生 満 鷺 和 同 げ 同 満 和 げ 鷺 和 鷺 げ 代 同 鷺

はりはりと食む

松本

碧 捌

はりはりと水菜を食むや蛸薬師

浮かれ猫来て廻る内陣

初出杜胸のバッジの嬉しげに

さつと広げるノートパソコン

月明り上げ潮どきのお蔵河岸

秋場所太鼓風にのり来る

院展へつひのひと筆思案中

ミニが先行くエスカレーター

前世は姫とおだててゲットする

天命見てと足の裏出す

おそろしや氷河解けくる温暖化

アララット山にノアの方舟

コニヤックを月にすかしてキャンプの夜

選手団泣く蚤の跳び撥ね

腕太き寮母にみんな目を伏せて

壁に掛け置く弾かぬ三味線

津軽より今年は早き花便り

はつかり号の春野駆けゆき

篠山 鈴 峯 松
原 崎 木 田 本
達 一 美 政
子 恵 奈 子 志 碧

達 奈 恵 志 恵 志 奈 達 志 奈 恵 達 奈

ナオ
水馴れ棹川門さ走る上り鮎

ちよつと帽子にもらふ擬餌鉤

大伯父は昔ジャズメン縞のタイ

「私の履歴書」やつとまとまる

女知事凜と答礼出初式

お茶汲み志願男現はる

シャワー室脱げばアポロのトルソめき

高ふるままに放心がきて

目覚むれば髪一束と髑髏

諸国遍歴乞食の僧

明星をしたがへ昇る望の月

ロフトの窓に黄落の街

ナウ
晚翠忌わらんべの唄やさしかり

祖母の代より守る糠床

リホームはバリアフリーで格安に

迷ひ雀を掌に乗せ

花万朶秩父原人住みし丘

飛石濡らす暖かき雨

*トルコ東部の高峰で、旧約聖書のノアの方舟の漂着地。
また、ロシアのコニャックの名でもある。

達 碧 恵 達 恵 志 奈 恵 達 同 奈 達 奈 恵 志 奈 恵 達

平成十二年二月九日 首尾
於 池袋 滝沢

地歌舞伎の

本屋 良子 捌

地歌舞伎の主役おほもて温め酒

口三味線に仰ぐ夕月

柿すだれ軒撓ふほど吊るされて

ホップステップジャンプする子ら

見るほどに楽しき百円シヨッピンダ

空魚籠提げて玫瑰の浜

虹の橋北海道より国後へ

冒険野郎の夢は大きく

読み聞かす不思議の森の物語

コウノトリより貰ふ幸運

婚礼の荷に入れられし犬張子

湯舟に玉のごとく沈みて

月皓々うつすら雪の積もる庭

餌付けの狸あらはれる頃

小説に勝る奇態にをのける

老眼鏡を掛けて外して

花の山線彫り幽か磨崖仏

春の障子にとどく水音

本屋 良子
田辺 桂
森川 淳

淳月良 淳月良 淳月良 淳月良 淳月良 淳月良 淳月良 淳月良

ナオ

リモコンで朝寝樂しむ日曜日

自然破壊が問題となり

落人の知恵を出し合ふ五箇庄

あの唄あの節繰り返し聞く

肩先にてんたう虫を止まらせて

トラクターにて掘りし新馬鈴薯

外つ国へ技術指導の命を受け

黒い瞳に心奪はれ

弾丸の飛び交ふ中の逢ふ瀬なる

グラスの罅を惜しみつつ撫で

宇宙船大きな月を映す窓

ナウ

兎の小屋に今年藁敷き

ほっかほか弁当囲む運動会

ベレーの下に覗く白髪

師と弟子に永遠の訣れの刻来り

うねりとなつて俳諧の道

天領の野へひとしきり花吹雪

幼なを抱く縁の囀

平成十二年二月二十日 満尾

文音

月 淳 良 淳 月 良 淳 月 良 淳 良 月 淳 良 月 淳 良 月

ナオ

しゃばん玉ふくらむ前にはぜて消え

加藤利

宏恵聖

少年の狂気抑える術もなく

一段おきにあがる階段

ヴェネティアの石橋を打つ初しぐれ

山口元

子藍聖

ミンクのコート肌にすべらせ

冬牡丹シーツの中で反る素足

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

小測ですこちらあの世のブッチホン

性懲りもなくまたも深酒

煙突の林を月の流れゆき

露にぬれたる電車一輛

「はいお待ち」鰯定食五百円

指でまさぐるポケットの穴

父の日をコレクトコールで祝われる

鴨居の額の当主代々

帯留は瑪瑙にきめて花衣

友が駆け寄る囀りのなか

宏聖

聖い

宏藍

元聖

同

宏藍

聖

い

元

子

藍

聖

恵

山口元

平成十二年五月二十八日 起首
平成十二年六月二十日 満尾
於 桜花学園大学

土用太郎

八代

嫋
捌

猫に声かけたる土用太郎かな

庭のどんがめ連れて挨拶

稀覯本混る蔵書を曝し居て

細工を凝らす模型飛行機

大食ひの大会月を待ちながら

葉唐辛子を筈にいつぱい

焼^ウけ跡の寂光院に木の実降る

新発意さんにちよつと惚の字で

幼な恋はじめはいつもかくれんぼ

売り地あります野っ原の果

沖縄のサミット不評人よらず

指笛^とだけでひとりカチャーシー

左遷^とされて月光浴びるちゃんちゃんこ

屋台熱爛俺の友達

ムツシユーはジャボネですかと不意に聞く

顔に合はない似非の金髪

あやかしの花に怨霊宿るらん

明けの春雷夢に遠のく

八代

式田和

生田常

義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋 義和嫋

ナオ
松蟬の響きの中の心地良き

立ち上がりたるネット情報

旅に来てまづはジョギング大統領

坂を昇れば海と白い帆

絡まりし小指の動悸木陰にて

罪作る度髭をたくはへ

とりあへず連れ子三人爺と婆

干し場に並ぶ布団かいまき

真向かひに裾野広がる八ヶ岳

不登校児は狎に癒され

高窓にいざよふ月のしらじらと

ナウ
守武忌なり千句詠み終へ

笑みもわく夜業の後のコップ酒

逃せし魚をおほぎやうに言ひ

千曲川ここより信濃川となる

アブストラクト画困る見物

としどしに花の香りのなつかしく

豆炒る母の手元あかあか

* 沖縄の自由舞踊

小 出 きよみ

義 嫺 和 み 嫺 義 和 み 嫺 み 義 和 嫺 み 義 和 嫺

平成十二年七月十九日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

翡翠の

山口 美恵 捌

翡翠の川たかぶらす刹那かな
まだ揺れつづく夏菜莢の枝
フアクシミリ吐き出す熱を掌に

国の訛が嬉しくもあり

若きらの自負心照らす月の影

新蕎麦を打つ会のたけなは

ウ
からからと風に鳴りある種瓢

ペンシルみたいなスタイルが好き

キス三度チェスの勝負に賭けてまで

世間知らずも武器になるらし

脛齧り捨て台詞のみ達者なり

怒りあらはに伐折羅神将

弓張の吹き流さるる凧に

熱燭ぐつと衿たてて飲み

執筆の取材はどこか刑事めき

料金不足戻る郵便

ようそろと岬の花に漕ぎ出す

春の絵日傘祖母にさし掛け

山 倉 佛 花 五
口 本 洌 卷 味
美 路 健 珠 蓉
恵

同 子 路 悟 路 悟 路 枝 悟 子 同 路 悟 子 枝 悟 子 恵

ナオ

羅宇屋など消えし浅草よなほこり

齒医者の子約ケータイで取る

覚えたわゲノム・IT・ドットコム

いつ頃届く二千元札

抱く間も藍の機嫌を覗きたく

心変りを隠す香水

着飾ってゆらりゆらりと熱帯魚

あふく銭では夢は買へまい

三線をかかへえいさあコンサート

塀の鳥居を気にしない奴

名にし負ふ秋の寒鯖味の良き

港の町に野分過ぎゆく

ナウ

大戦に逝きし同胞偲ぶ月

鶏を増やせり豚も増やせり

土掘りにリース調達シヨベルカー

中也の詩集いつかぼろぼろ

魔術師は鞆に花をあふれさせ

蹴ったボールの行方朧に

平成十二年七月十九日 首尾

於 芭蕉記念館

枝 恵 子 同 悟 路 悟 枝 子 枝 子 路 子 悟 同 路 悟 路

源

心

源心や

源心や水辺に揺るる若緑

黄金くがねの鯉の泳ぎのどらか

弥生尽ネット配信きりもなし

カレー弁当売れる激辛

歳ウの市犇く人の上に月

除夜のお詣り新妻を連れ

あな愛しこんな処に靨あり

棚のこけしの少し下が目

みちのくの茅葺厚き白布の湯

ダム放流のサイレンを聞く

みんなして地球を守る話合ひ

雀ちゅんちゅん家鴨よたよた

舞ひ踊れ今宵ひと夜を花の下

ぬた和へにして和布芥菜

佐古 英子 捌

佐古英子

倉本路子

副島久美子

百武冬乃

篠原達子

梶井時子

美

路

乃

英

路

達

路

時

ナ
オ

ホイットマン詩集の口絵春惜しむ

アンティーク時計遅れがちなり

継嗣さる地盤看板利権まで

籐の寝椅子にまた舟を漕ぎ

ほんのりと梅酒に頬を染めし女

男なで斬り芸の肥に

鬱のとき魑魅魍魎の跋扈して

虫の声聞きたばこ一服

月皎々外モンゴルは草の海

ホームスパンを紡ぐ稍寒

ナ
ウ
曾祖父は山高帽の銅像に

双子が見てるそれぞれの夢

花浴びて五輪選抜特訓中

穀雨過ぎたる土の潤ひ

平成十二年四月二十六日 首尾
於 源心庵

乃 英 時 達 英 美 時 美 乃 路 乃 同 美 達

冬立つや

冬立つや日本列島晴れわたり

声ほがらかに初鶴の群

ヨーグルトシロップかけて供すらん

楢田に直す円いテーブル

停車場に女がひとり十三夜^ウ

林檎の香満つ逢引の道

秋興の古き大津絵かけ並べ

呑み抜け野郎鬼もほほ笑む

ぼろぼろと編集長の誤字脱字

避難階段ふさぐ返品

客待ちの馬が耳振る出湯の町

ねぢり鉢巻太鼓打つ子ら

今年また開花予報のはづれたる

弘前城の草の芳し

膝送り

篠原達子

百武冬乃

松本碧

登坂かりん

金久保淑子

達乃

乃碧

人

淑

達

乃

碧

人

ん

ナオ

村いくつ抱へ大きな春の虹

測量隊が機材かついで

停戦の丘に洗濯物を干し

唯一神を拝む厳寒

ウイリアムブレイク創る「無垢の歌」

汚れよごれて真実の恋

椿姫減量やつと間に合ひて

ポカリスエットボトル買占め

ナイターの月へ糸引くホームラン

武者人形の威張る床の間

ナウ

探知機に魚群発見漁労長

趣味の尺八なかなかのもの

山寺の杉の秀かすむ花嵐

昆虫図鑑にたしかめる虻

平成十二年十一月八日 首尾
於 池袋 滝沢

淑 達 乃 碧 人 達 乃 達 淑 乃 達 淑 乃 達 淑

春浅き

雉鳩の番並びて春浅き

ゑのころ柳風にふはふは

スクートの暖かき街過ぎるらん

発刊競ふネットマガジン

岩^ウ清水ボトルの中に月の揺れ

螢追ふ手の闇に重なる

二本目の座敷に髪を撫であげて

香りひろがる焙煎珈琲

居心地は未だ分らず知事の椅子

タロット占ひ独り深夜に

スペインの小さき村の白き小屋

鴉の嘴の壺にとどかず

大鼠捕へし猫の花の春

富士山頂に立てる初夢

副島久美子 捌

副島久美子

山口美恵

金久保淑子

木村真呂

久保光代

同

淑

恵

淑

呂

恵

代

呂

代

ナオ

角界の八百長話ちらつかせ

はみ出してゐる蛸焼の蛸

地境は祖父の代からあいまいに

喧嘩祭の粋な締込

コギヤル等の黄色い声に振向いて

同じ形に整へる眉

朝月夜嫉妬の炎冷ますらん

エデンの園の林檎たわわに

グレゴリアン聖歌流れて秋闌くる

水澄む湖に糸垂れる人

ナウ

石をもて追はれし故郷遙かなり

ふらり立ち寄る愛の献血

紅しだれライトアップの花の宴

築地を濡らす清明の雨

平成十二年二月九日 首尾

於 池袋 滝沢

呂 淑 惠 呂 淑 同 呂 淑 代 呂 淑 久 代

蒼穹へ

蒼穹へ透き通りけり冬桜

鵲の声のひびき来る苑

Eメール使ひ慣れたるケータイに

キッチンファッショニングエプロン

藍甕ウの深く眠れる小屋の月

二人の影に虫時雨降る

肌寒と甘えて謎をかけてをり

いっそ小田急で帰るマンション

売れっ子のコピーライター初入賞

金がいいですめっちゃ悔しい

石は流れ木っ端は沈む世に住みて

老師大拙英文の禅

花ふぶく岬に跳ねる当歳馬

獲れ盛りなり鯨数の子

吉村ゑみこ 捌

吉村 ゑみこ

東 明 雅

副 島 久美子

伊勢本 如代

佐古 英子

久

代

雅

久

同

雅

英

代

雅

正客を迎へてほのと春燈

大名時計こちこちと鳴る

赤門を目指しまたもや浪人し

終身雇用今や底冷

神だのみ銀座のママに惚れこまれ

粋なバーテン恋のシェーカー

搭乘の世界一周豪華船

小千谷縮の軽き着心地

本水に書き割りの月夏芝居

絵空事なる半生を説き

新世紀指折り数ふ頃となり

A1B0 手懐け忠犬にする

山莊は今を盛りの花揺れて

帽子おんなじ遠足の列

平成十二年十一月二十九日 首尾
於 源心庵

久 雅 英 久 英 代 こ 雅 代 雅 久 英 代 英

二十韻

組鐘の

組鐘カリヨンの淡き音色や夕端居

路地に心のかよふ打水

初めてのパソコン講義聞きまして

キャンバスに画く秋のいしくれ

影ウを曳く松に三日月まざれたり

鵲の猛りに急かれ山畑

乙女子は頬かがやかせ追ひかける

わたしのハートしばられたまま

単線の鉄路いちづに歩み行き

北の大地に転ぶ大木

青島ゆみを捌

東 明 雅

青 島 ゆみを

宮 川 侑 子

く の あ や

杉 山 壽 子

侑

を

壽

や

を

ナオ
原潜は嘘と隠蔽凍る海

月に暈あり火の番が居り

飽き性のどうにもならぬ止まらない

卒塔婆へ酒たらふくに注ぎ

じりじりと溶ろかしてゆく銀杏鬚

すぼりとはまる後添への釜

ナウ
手づくりが紡ぎだされてひとの世に

陽は暮方に糸遊の里

ひと吹きに神の降りくる花の奥

スプリングコート店先に立つ

平成十二年八月三十日 首尾
於 杉山壽子宅

や 仇 を や 壽 を 仇 壽 や 仇

まてば椎

蛸や比企丘陵のまてば椎

雀おどしの響く爽涼

研修生朝月仰ぎさざめきて

携帯電話にテスト情報

豊穰^ウの島のコテージ巡る旅

「あとから連れが」と口ごもる女

気どらなくあっけらかんの所作が好き

いつもの路地に猫の集会

リストラという首切りが大流行

Ｕターンする木枯らしの村

小池 啓子 捌

小池 啓子

中野 昌子

秋山 志世子

青木 泉子

おおたけんのすけ

泉

昌

泉

け

世

ナオ
月ゆらぎ雲払ひたる千葉笑

酒も一升水も一升

ささやくに中のひとりが邪魔になり

エステティシヤンの胸の汗ばみ

病む母のはらり扇子をとり落す

襦袢が取れて褒められる嬰

ナウ
柔道の対戦終へてバイキング

卒業式の三部合唱

降る花の止むこともなき甃

軒より高く石鹸玉吹く

平成十二年八月二十六日 首尾
於 国立婦人教育会館

昌 け 世 昌 啓 昌 泉 世 泉 け

エンデバーの

エンデバーの宙より春の雪舞へる

地球の裏に冴返る月

葦雜炊熱々の椀供されて

群がる家鴨分けて来る人

スヌーピー描き続けて五十年^ウ

待降節の朝を寝すごし

公然と車内で化粧完了す

不倫ばれても躲すリストラ

掌のうちにジョーカー二枚残りをり

小児病棟梅雨の晴れ間に

五味 蓉子 捌

五味 蓉子

佛 浏 健 悟

中 野 昌 子

浅 賀 淑 代

渡 辺 信 昭

代

昌

昭

代

悟

ナオ
石ころの中に魚の貌がある

懸賞応募ハガキ幾束

望月に無用の用を説かれたり

数ならぬ身を思ふうそ寒

猴酒かなはぬ恋をあきらめず

東京砂漠ケ・セラセラセラ

ナウ
株相場織り込み済みのバグのこと

お地蔵さまが好む饅頭

飛花落花奏樂堂の越天楽

山の裾まで駆けよ若駒

平成十二年二月二十日 首尾
於 立川市女性総合センター・アイム

同 昌 代 悟 昭 同 昌 悟 昌 昭

似顔絵描き

あふれ蚊の似顔絵描きの裾にかな

回転木馬よぎる月影

零餘子飯異邦の人に供すらん

山の出湯を飲んで元気に

軍用機^ウエンジンの音響かせて

あごひげ剃れと無理なお願ひ

柔ちゃん婚約近いか報道陣

孔雀が羽をひらく頃合

バロツクの驚愕^{ウオタアサアプライズ}噴水ふきあぐる

豆腐すべらす近き雷

近藤 守男 捌

山口 美恵

永島 靖子

松本 碧

高橋 豊美

近藤 守男

恵

碧

子

美

恵

ナオ
雲中の供養菩薩に念じつつ

伏見狐の土偶愛らし

きのふけふ会ひて遭はざる恋をして

尻に敷かれりや亭主落ち着く

凍月のアロハロメオを磨きあげ

背後に聞こゆ有線の声

ナウ
黒白の映画むかしの物語

海市見らるる町に生まれて

予報士の笑顔で示す花前線

油炒めの芥子菜に酒

平成十二年九月二十五日 首尾
於 桃径庵

子 男 美 恵 子 恵 碧 子 美 碧

立冬や

立冬や神鷄むつくと立ち上がる

玉砂利に和す冴ゆる一声

おもたせの名物弁当楽しみて

次を買ふもの選ぶカタログ

月^ッ燦々クロンボルグの野外劇

煉瓦畳に木の実ふる頃

似顔絵は二人いっしょに秋深む

籍は入れない必然の恋

洗ひ熊とかくこの世は棲み辛く

常備薬には飴玉もある

杉山 壽子 捌

杉山 壽子

宮川 侑子

武村 利子

壽

侑

利

壽

侑

利

壽

夏^{ナオ}を追ふ嵩高リユツク色いくつ

手筒花火師月へ挨拶

熱くなる血潮は出自の根っこより

般若^{ハヤ}若^{ニョ}ごころがときに蠢^{クモル}き

擦^スり足で寄れる男の味淡泊

オリンピックねつオフサイドへと

故郷^{ナウ}の墓の周りは変りはて

畑^{ハタ}焼く点のところどころに

子の群れに風を遊ばせ花古木

幸せ満てる春に乾杯

平成十二年十一月十三日 首尾
於 杉山壽子宅

細川研

仇 三 仇 利 壽 利 仇 壽 利 仇

散り紅葉

文音 須田 智恵 捌

散り紅葉紅ことさらに風に舞ふ

須田 智恵

凍土踏みていそぐ学童

松本 碧

靴箱にグローブボール投げいれて

池田 やすこ

郵便集配大口バッグ

山本 要子

贈^ッられし誕生祝ひに望の月

碧

抹茶を立てて栗の羊羹

や

デートする秋のラウンジ混むならん

要

甘え放題けふも甘えて

恵

修復をじつと見つめる宮大工

碧

湖の上ゆく一ひらの雲

や

宵^{ナオ}の月髭につきたるビール泡

ふらんこ毛虫ちよいとゆらせば

義を忘れ右往左往の政治劇

あえて不倫を書きし藤村

さよならの代りに熱き口づけを

国境までついてくる犬

ヘルシンキ五輪なつかしザトベック^{ナウ}

春のかぜ癒え旅を夢見る

花曇足止めて聞く鐘の音

おはようさんとのどらかな顔

平成十二年十一月二十日 起首
平成十二年十一月二十九日 満尾

碧 や 恵 碧 や 要 や 碧 要 恵

黒き種

掌のなかのこの軽きもの黒き種

パソコンメール交す長き夜

濁りたる蝕甚の月高層に

茂みのあたり山鳩の声

宗隆寺翁の句碑のありと聞く

遊女ふたりを天秤にかけ

金髪の娘をさらふ高級車

西湘バイパス砂まじる風

門柱にクリスマスリース飾るころ

送別会に囲む河豚鍋

高瀬 美保 捌

高瀬 美保

内田 麻子

渋谷 祐子

杉崎 雅子

岡山 朱藍

麻

祐

藍

麻

ぐるぐると世界が回る下戸の酒^{ナオ}

火星ごよみに洪水の跡

畳屋と屋根屋ばかりが儲かつて

わたしの彼は半鐘泥棒^{*}

月明りあらがふ腕に汗ひかり

恋の果てには待つ蟻地獄

ふら^{ナウ}ここを揺すり幼の泣きやみぬ

柔らぐ土の青き踏む犬

転任を誰にも告げず花の雨

春障子開けオカリナを吹く

*半鐘泥棒（ひょろりと背の高い人）

平成十二年十月二十一日 起首
平成十二年十一月二十五日 満尾
於 梶が谷房連庵

雅

祐

藍

麻

藍

祐

相馬 美沙子

齋藤 久美子

沙

美

万代で

組鐘の淡き音色や夕端居

宵待草の似合ふ別荘

親子連れ散策コースのびやかに

小川を渡り小道辿りて

月の客かかへてきたる謡本^ウ

皿に石榴の粒の艶やか

莫逆の友とクラツシユ冷まじき

たゆたひし身は尼となりたる

わからない介護保険のあの手妻

一ひき二ひき羊夢路に

武村 利子 捌

東 明 雅

武 村 利 子

伴 野 末 季

中 森 美 保 子

山 田 歌 子

皿 季

高 橋 良 風

保 風

風 保

季 風

ナオ
杜氏来るきりと鉢巻茶髪なり

劇場はねし凍空に月

炊きあげる味は自慢のかやく飯

ほぐしほぐしつ恋の大技

スマイルで乙女の悲願成就期す

海外旅行今がお値打ち

ナウ*
万代で生れし明雅師二十韻

春の障子を開ける楽しさ

山と谷日にきらめきて花ふぶく

空のたかみへひらりてふてふ

*昭和五十九年神田の旅館万代ではじめて二十韻興行

平成十二年八月三十日 首尾
於 杉山壽子宅

歌 風 保 季 歌 風 歌 利 歌 保 季

彼岸会や 文 音

彼岸会やB・G・Mに土鳩啼き

塔の影揺れうらかな池

春暖炉自画像描く手すさびに

熱き珈琲ババロアの味

ゴンドラに月のかけらの降りそそぎ

笑顔爽やか長身の男

青春は林檎さくりと噛る時

本と旅行で消えし給料

一匹の犬三百の羊追ひ

味噌玉作る村の家々

東 明 雅

米 谷 貞 子

東 郁 子

雅

貞

郁

雅

貞

郁

雅

ナオ
ちゃんちゃんこ座敷童子よ出ておいで

サッカー中継いまやたけなは

ジンの酔優勝せしも夢の中

お茶屋の螢ほのと明滅

金婚の旅宵宮に湧く月夜

皆美しき思ひ出の人

ナウ
広重の版の蒼さの深々と

習ひそめたる三線の曲

だちびん
抱壇を腰にエイサー（琉舞）花万朶

栄螺・常節豊漁に沸く

平成十二年三月二十一日 起首
平成十二年六月二十日 満尾

郁 貞 雅 貞 雅 郁 貞 雅 郁 貞

秋祭

村田 富美 捌

声高に屋台の準備秋祭

柳散り込む脇の水桶

月上がる正餐の席賑はひて

ネクタイただし楽士長立つ

パリよりのインクの褪せしエアメール

幼なじみと逃げた長崎

坂下る君の双手の我が肩に

炊事洗濯万能の人

消しゴムとちびた鉛筆久女の忌

炉端に飴戻りくる頃

村田 富美

島村 暁巳

須賀 敬子

藤井 芳子

敬

巳

同

美

巳

敬

鏡池樹上の影は何ならん^{ナオ}

己見惚れて墮ちしナルシス
神殿に誓ひし言葉つまづきて

日焼けの肌の染まる抱擁

温泉に小猿の泳ぐ夏の月

翡翠の指輪何処に落とせし

万葉の秀歌^{ナウ}講じて五十年

列を乱さず帰る雁

北国の花の盛りに美酒酌まん

夢見て笑ふ稚児^やに春の陽

平成十二年十月二十一日 首尾
於 赤城社会教育会館

敬 巳 美 巳 美 敬 芳 美 敬 巳

立冬_ゝや

立冬や腹の立つこと多きまま

はや用意する暖房の器具

満ち潮に浮かび来るもの何ならん

デジタルカメラ隠し撮りする

山形^ッの「もつてのほか」とふ菊に月

かなかなかなと青き声して

新発意は秋季中退十七歳

マラソンランナー迷ひふつきる

捏造の遺蹟発掘騒がしく

幼き頃のぬり絵はみ出す

宮川 侑子 捌

式田 和子

高橋 良風

くの あや

長谷川 芳子

武村 利子

宮川 侑子

和

風

や

芳

「おっはー」のおとほけぶりに大爆笑^{ナオ}

サルサダンスに玉の汗かき

夏月はシュールレアリスム宇宙船

ちゅうの唇外れがちなり

こりもせず酒で紛らす朴念仁

自己嫌悪中猫も気落ちし

漢方^{ナウ}で免疫力を高めんと

和蘭芥子苦み辛みも

三段重花見弁当金蒔絵

夢もふくらむのどろかな時

平成十二年十一月八日 首尾
於 名鉄グランドホテル 鳳凰

同 利 僂 和 風 や 芳 利 和 僂

絵志野

待たれしや絵志野の壺に貴船菊

膝をただして観月の窓

雁渡る雲ひとつなき山の端に

もう帰らうよ児らの呼び声

勾玉^ウの念じ石より力もらふ

ダンスレックスン我を忘れて

ジュテームといひかけて息つまらせる

非常灯のみ映画終演

腰痛に氷柱の先の尖りゐて

まづ熱燭をぐつと干したり

山田歌子捌

山田歌子

青島ゆみを

中森美保子

杉山壽子

細川研三

歌

を

美

壽

三

ナオ
ゆらゆらと街の上行く飛行船

右へ左へ手操られる奴

まなこ閉ぢ恋に殉じた破戒僧

汗もしとどに妖し罪の子

月上げて晩夏の町のしづかなる

老舗のあるじ餡の講釈

ナウ
苦虫を嘔み潰しゐる旅の人

春深くして馬場はどよめく

飛花落花しきりに天を奪ひをり

名古屋友禅捌きのどやか

平成十二年十一月八日 首尾
於 名古屋ニューグランドホテル

歌　を　美　壽　三　歌　を　美　壽　三

半歌仙

小抽斗

青木 泉水 捌

走梅雨整理のつかぬ小抽斗

観察日記這へるでで虫

縄跳びの波の高さを競ふらん

バンカーショットうまくいったぞ

領事殿月の砂漠に句を吟じ

目を転ずれば鴟の早贄

曼珠沙華筑紫次郎の肅々と

本店を売る老舗デパート

意を決し黒を打ち込む盤の上

千姫さまは天守にござる

青木 泉水

島村 暁巳

古賀 一郎

濱中 邦子

巳

郎

巳

郎

邦

郎

きつきゅうちよ
鞠躬如アツシーミツグ馳せてそろ

悴んだのねと指を舐られ

冬の月一町四方に嬰の声

かどのうどんやかろのうろんや

散骨の舟から注ぐ赤ワイン

流氷見むと渡る半島

王朝の残影を追ふ花明り

クラリネットの調べうららか

平成十二年五月二十七日 首尾
於 新宿角筈地域センター

邦 郎 巳 郎 泉 邦 同 巳

樟若葉

樟若葉欄宜すたと通りけり

苗壳憩ふ石の階

版画展大壺ひとつ置かれゐて

記念写真に背伸びしてゐる

やうやうに吹けた指笛初月夜

童話のヒーロー墓塚の中

チ^ッーズ積む馬車は花野を軋みつつ

帽子が似合ふ祖父と曾祖父

鹿鳴館侯爵夫人頬染めて

絹の布団に隠すご存じ

秋山志世子 捌

秋山志世子

島村暁巳

長崎和代

佐々木有子

須賀敬子

有

巳

代

巳

同

悴みし心溶けゆく湯気の月

坂を下れば遠き漁火

五選目の村長またも大勝す

アイルのパブにハーブ名人

愛犬のトムソーヤも耳をたて

春場所終へて里帰りする

有珠山の麓に集ふ花明り

白い御飯にふはり青海苔

平成十二年五月二十日 首尾
於 赤城社会教育会館

有 敬 代 已 同 敬 已 有

風の甲斐

谷々に武者の幟や風の甲斐

青葉隠れの駒のいななき

びつしりと行事予定を黑板に

もて囃さるる深海の水

月光を背に受けつつ蹀り口

一行墨蹟秋の翳さす

源五郎鮎色^ッづけば紅葉鮎

ネット商売菓子も薬も

DNA 解明の先神不在

世直しの唄うたふ三人

池田やすこ 捌

池田やすこ

松本 碧

鈴木美奈子

や

碧

美

や

碧

美

や

ふり返る男の帯のこま結び

抜け出して逢ふ雪の隧道

バター茶の湯気にゆらめく寒き月

冬虫夏草酒に漬けこむ

事多き昭和の過ぎて長寿国

軽いリュックで春の低山

花の下マリオネットの縞ズボン

初めて弾けたのでふてふの曲

美 碧 や 美 碧 や 美 碧

平成十二年六月十二日 首尾
於 新宿 滝沢

返り梅雨

返り梅雨篠突く昼を集ひけり

ゼリー大皿連句三卓

ここからはスイッチバックの列車にて

脇に抱へた推理小説

月の下砂山を掘る黒い影

錆びたナイフにすだく蟋蟀

濁^ウり酒忘れ去りたいことばかり

ジェット機の窓頬を押しあて

じりじりと内壁焦がす嫉妬の火

ただひたすらに抱きあふ闇

稲垣 渥子 捌

八木 聖子

稲垣 渥子

山口 元子

黒木 美代子

佐久間 和宏

美

聖

元

宏

元

サミットの各国首脳の忍者ぶり

朱塗りの箱に京のお干菓子

五重塔仰ぐ捨て犬寒の月

マフラー首に若さ気取って

あらあなたいつ帰ったの異界から

黄砂に曇る丸善の前

車椅子しばし留めたる花の枝

子ども等の夢託す風船

同 聖 渥 元 宏 聖 美 渥

平成十二年七月二十五日 首尾
於 スペース K e i

江戸百景図

梅田 利子 捌

「江戸百景図」大川に雷とどろけり

土用鰻のざわめける筈

あにおとと模型飛行機組み立てて

洗濯物を袖だたみする

月の照る山頂にあり方位盤

他人には言はぬ舞茸の場所

文化祭以下同文の賞を受け

アイボに続く試作ぞろぞろ

ウイスキーショットグラスの独り者

編集室に妙齡の美女

梅田 利子

原田 千町

八代 嫺

中林 あや

金久保 淑子

同

町

嫺

町

や

近松忌いっそ駆け落ちしてやろか

警備テントも檻樓市の月

臍繰りの外貨投資でハイリスク

思ひ出食べて生きて居ります

鬚切って口滑らかになりました

晴を呼び込み照鷺の鳴く

枝垂れては花璣珞の揺れ揺れる

若衆競ふ伴天連の風

平成十二年七月二十六日 首尾
於 東京ウィメンズプラザ

町 や 淑 町 嫋 同 町 淑

風炉点前

風炉点前水琴窟の鎮まりて

梧桐の陰の方丈の庵

ひとり碁の勝ち負け自在埒もなし

待ちあぐねたる入集にっしゅうの沙汰

敲くべきかはた推すべきか月の門

隣りに借りるままかりの飯

野ウの錦山の錦も色深み

酔ひにまかせた戯れ言が仇

イヤイヤと抗ひつつも身の火照り

許せるものと許せざるもの

木村 真呂 捌

木村 真呂

小林 久子

呂 子

核兵器廃絶の夢捨てまじく

なぜに黙せる荊冠^{*}のひと

月今し大聖堂の玻璃に冴ゆ

釣詩鉤酌む牡蠣船の内^{*^{*}}

新しき世紀への夢語りなむ

生きとし生けるものの幸せ

薄墨の名残りの花に没り日映ゆ

耕し終へた里の寧けさ

*イエス・キリスト

**酒の異称（蘇軾詩）

子 呂

平成十二年四月四日 首尾
於 無可有庵

萩咲くや

萩咲くや客の賑はふ滋賀の里

月見の宴に地酒持ち込む

鴈高音声を残して飛び立ちて

家族の笑顔母の土産に

手を上げて元気に幼な歩み寄り

風花町にちらちらと舞ひ

小原^ッまで誰も詣でず久女の忌

夢占ひも吉と告げられ

趣味仲間いつか忘れぬ仲となり

ついほだされる彼の笑顔に

加藤 治子 捌

加藤 治子

繁原 敏女

谷本 守枝

子

女

枝

子

女

枝

子

世紀末あゝ十代の病める罪

孟母三遷故事に習はむ

宵山に皆既終りし赤き月

夜店に並ぶ和金・出目金

シドニーのニュース飛び交ふ電波局

パール婆の揺らすふらんこ

花の下凝った嗜好の野点席

蝶ひらひらと添へる煌き

女 枝 子 同 女 同 枝 同

平成十二年八月十三日 首尾
於 加藤宅

鴨のこゑ

川名 将義 捌

海暮れて鴨のこゑほのかに白し

芭蕉翁

うつらうつらと聞きし炉話

沢田洋々

何故に教師のチョークよく折れて

川名将義

廊下にしるき猫の足跡

洋

雨上り棚田それぞれ望の月

白杵游児

芸術祭にノミネートされ

柴田寿賀

特大の芋虫に妻後ずさり

洋

こんなところに誰の恋文

義

老妓待つ曲輪へ急かす人力車

游

燃えてしまへば年の差なんて

寿

アラビアの石油の利権瀬戸際に

古代史ツアー半ズボン穿き

月涼し僧の木乃伊に迎へられ

ワインは熟す地下室の樽

定宿に持病のくすり届けられ

読めぬ漢字は電子辞書引く

県境を跨いで敷きし花筵

鞠の転がる陽炎の径

義

寿

洋

游

寿

游

義

洋

平成十二年二月十六日 首尾
於 中央区立産業会館

芽木山

色隠る芽木山猿の群わたる

谷間にひびく鳥の囀

春暖炉鍋のシチューをあたたためて

仲良く同居女系一族

居待月やうやく残業終はりたり

遠き胡弓の爽やかな頃

クルージングベカンベ祭立寄らん

一気呑みするウオツカの味

胸毛濃き君の力は熊に似て

薩摩訛にとろとろと融け

桑原 美津 捌

桑原 美津

山田 喜美枝

東 明雅

橋本 京子

枝 津

津

京

雅

倉本 路子

津

ストレスをキャンバスに向け塗りつける

夏風邪夏痩せ新発意の月

夜毎出るおいてけ堀の悪河童

頓智咄に残る彦一

玩具館迷子の大人呼びだされ

電池が切れた夢で唸さる

はんなりと京友禅の花衣

ふはりふはふは逃げる風船

枝 雅 京 路 津 枝 路 京

平成十二年三月十二日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

母馬の瞳

母馬の瞳の潤み南吹く

夏鶯の声を聞く里

ひとしきり食材売場込み合ひて

ビーズで編んだケイタイの紐

高層のビルの間に今日の月

出張帰り木の実独楽見せ

秋^ウ深し五百羅漢を面白く

江戸の名残りの川越街道

ガンダロのイモねえちゃんが蹴つまづき

色好みなる髭のペンキ屋

久保田庸子 捌

久保田 庸子

武井 雅子

鈴木 美奈子

島村 暁巳

東 郁子

巳

郁

奈

雅

巳

虎膏葉効きめあらたと伝授する

岩山照らす月の冴冴

テノールの響くゴンドラ夢の旅

古き友訪ひヴィノロッソ酌む

野球帽褪せた写真に並びをり

鎮守の杜に続く春泥

鯉跳ねて花一片の散り初むる

風合戦の糸手操る子等

平成十二年五月十四日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

奈 巳 雅 奈 同 郁 雅 奈

秋日和

開通を祝ふ麻布の秋日和

月見団子に並ぶ行列

そぞろ寒ゆき丈のばす仕事して

マッサージ器が通販で売れ

音の出るパソコン学ぶ管理職

猫もどこかへ預けたき暮

初天神おみくじ引けば小吉と

あの指切りはなんのためかな

「朗読者」テープに愛を詰めこんで

上海仕込み絶妙のキス

式田 恭子 捌

式田 恭子

松本 碧

式田 和子

松原 弘子

恭子

和

碧

和

恭

和

豪華船ここで去る人残る人

香水にほふ妖怪もゐて

ほろ酔ひと縁台将棋のぞく月

悲喜こもごものメダル競争

もういいよ生きてゐるうち言ひたくて

琴の調べに春の夢覚め

鶯は花を浴びつつ枝渡り

山門の額蝶のまつはる

*「朗読者」……ベルンハルト・シュリンクの著

松永美穂訳・新潮社発行

平成十二年十月二日 首尾
於 神田文教場

弘 碧 恭 和 同 弘 碧 弘

水琴窟

梅ふふむ水琴窟に耳よせて

幼な子あそぶ春泥の庭

陽を集めステンドグラス麗らかに

ゴブラン織のバッグ仕上がる

骨董の風入れ済ませ良夜なり

あきつ群れ飛ぶうす暗さ丘

墓地隣ビル建ち上がる鬼貫忌^ウ

厚底靴でバスに跳び乗る

携帯の着信音に怯えつつ

忍び通ひの愛が最高

須賀 敬子 捌

須賀 敬子

三木 俊子

竹田 登代子

神谷 安子

高橋 豊美

豊田 好敏

敏

俊

美

敏

蚊を払ふ君の気配す蚊帳の裾

暗闇祭月光の下

上院に女房送り若隠居

インターネット狙ふハッカー

大寒の大海亀は水底に

波かぶりつつ九十九里浜

酒受けて花の姿も一段と

独活の酢味噌を藍の小皿に

美 敏 登 敬 安 俊 登 美

平成十二年二月十九日 首尾
於 赤城社会教育会館

初花を

初花を求めて変へし散歩径

東風心地よきブラウスの衿

珈琲店春の暖簾をかくるらん

うちのおやちは少し頑固で

角刈りの垣根に上る望の月

石に身を擦る鼻曲り鮭

べいごまに興ずる子らのかしましく

ケチャが鎮めるバリ島の神

篝火はわたしの胸を焦がすほど

お目もじをただ待ち侘びて候

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子

坂本孝子

近藤守男

上田由紀子

近藤燕肝

孝

男

孝

由

孝

酔ひ醒めにつるりつるりと心太

金メダリスト軽く遠泳

赤道を越え来し鸚鵡月寒く

街のねずみは冬眠もせず

臓器得て命のバトンタッチする

回忌に拝す軸の落款

ふるさとの山の向かうのりんご咲く

開店セール配る風船

平成十二年四月二日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

男 由 千 男 肝 孝 肝 男

虎が雨

いさかひのもつれもつれて虎が雨

こぼれて久し木斛の花

エッチング線丁寧に彫るならん

CDを聞くマンションの部屋

月の頃唐黍を売り世を渡る

候鳥の影川面過ぎゆく

北溟^ウを目ざして急ぐ落し水

ニユーヨークから子の便り来て

ロザリオに偲ぶ聖地の大伽藍

青き瞳に秘めし憂愁

武井 雅子 捌

武井 雅子

東 郁子

下 鉢清子

雅

郁

清

筒井 紅舟

雅

郁

清

卯酒恋の獲物はどうしよう

うはなり打ちに集ふ寒月

牧場につづく無人の停車場

夢に旅する故里の山

逃げ出したロボット犬を連れ戻し

めばるの煮付鍋島の皿

衣桁には一竹斎の花衣

ゴールドデンウィーク刀自は揺り椅子

平成十二年六月十一日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

清 郁 雅 舟 郁 清 舟 雅

杜 若

杜若風の連れ来る狐雨

右に左にほととぎす鳴く

幼児のママゴト遊び母まねて

地道な主婦のキャリアアウーマン

離まで客を招じて望の月

籠に盛りたる通草松茸

美術展皆のとどまる魁夷^ウの絵

余韻しばらく街に出でも

セクハラかどうかお前の胸ひとつ

悪女ぶっても膝がガクガク

谷 本 守 枝 捌

繁 原 敏 女

谷 本 守 枝

加 藤 治 子

枝

治

同

枝

同

女

同

数珠とりて南無阿弥陀仏声高に

百年を経し遠野曲り屋

冬の月リストラ前に辞めようか

レシピ見ながら作るリゾット

政界の駿馬も駄馬になり下り

欠伸している皮張りの椅子

千年の樹齡を重ね匂う花

炮烙を割る壬生の狂言

治 女 同 枝 女 枝 女 治

平成十二年六月二十四日 首尾
於 桜花学園大学

アルプスを

アルプスを植田に映しそよぐ風

森のかげより郭公の声

水彩画小皿に筆をひたしゐて

独り棲むには広すぎる家

新豆腐ビルの狭間の月を買ふ

夜なべついでに辞書で索引

放屁虫^ッ三井寺班猫同じ虫

「勅語」「神国」失言でなし

マザコンも仲人口で秀才に

ゴミ分別は宅のダーリン

田村 満子 捌

田村 満子

橘 朱鷺子

式田 和子

蒲原 志げ子

橘野 代々子

本田 弥生

朱 生 和 げ

島暮し船の汽笛に妻恋ふる

消炭壺にしかと蓋して

月賞でよEメール来る松迎へ

酒は吟醸王紋の夢

紙截の芸に憧れ内弟子に

うから集ひて喜寿のお祝

立札の外人もゐる花手前

馬柵の仔馬の毛並つややか

平成十二年七月五日 首尾
於 鎌倉おんめ様

同 代 げ 満 代 生 和 代

春 渚

父真似て口笛吹く子春渚

若鮎の群追いかける人

蒲公英の綿毛のぱつと飛びたつて

携帯電話響く着メロ

月の宴名脇役の登場し

ゆず酒少し健康のもと

何はさて厚物咲きに余生かけ

趣味をいかして気象予報士

熱帯夜心がわりをたしかめる

ひと違いからはじまった恋

長坂 節子 捌

長坂 節子

高橋 良風

加藤 治子

福井 直子

風 節

治

風

直

同

上役の香港旅行は秘書を連れ

風ふき抜ける不況列島

己が過去凍れる月に見透かされ

石油ストーブ遂に引退

骨折の癒えステップもかるやかに

願い託して写経三昧

朧たけし花守遂に鬼となり

衣の郷に霞む学舎

風 節 風 同 治 風 治 直

平成十二年三月二十一日 首尾
於 桜花学園大学

柱の瑕

ぜんまいや柱の瑕のいまむかし

鴈に遅れて帰る白鳥

春シヨール見送る人の手をあげて

ポケットの中時計コチコチ

独り居の悠々自適照らす月

柚の香りの淡き練菓子

去来忌ウの小倉の亭に人の影

すねることもに親もふくれる

幾年か不毛の荒野さまよひて

横時雨の街ひそむ妖怪あやかし

生田日常義 捌

青木秀樹

太刀川龍夫

松本碧

生田日常義

夫

樹

碧

義

夫

樹

金髪をかたことだけで抱きしめ

くちづけあつくこれで終りね

巴里祭のロマネコンティに酔ひつふれ

月の波間に揺るる火水母

葛籠より父の通知簿千人針

パッチワークでつくる壁掛け

花の庭守札の門は高々と

紅型を着て野遊びの人

平成十二年三月十六日 首尾
於 電通SLビル

碧 義 夫 樹 碧 樹 義 夫

長崎南蛮余情

長崎の南蛮余情よなぐもり

髭濃き水夫かこに戯るる初蝶

腕時計入学祝ひに贈られて

ワンルームにはカラーボックス

雲切れてまんまるの月裏山に

振つてはとばす鶏頭のたね

名匠ウに粗忽ありけり囃籠

チエロの響きはヒトの音域

英文のカルテの手引読み返し

からから乾くがはんぽの脚

登坂かりん 捌

登坂かりん

今宮水壺

佐々木有子

竹田登代子

倉本路子

代

壺

有

ん

路

あれ以来食の通らぬ前角力

ベッドに彼女転がした夢

火消壺流しの下に押し込んで

月はさておき寝酒少々

恐ろしきサイバー・テロの世紀末

神頼みてふ他力本願

花愛でて后は筆をとりたまふ

春のドレスのラベンダー色

平成十二年三月七日 首尾
於 新宿大久保地域センター

壺 路 代 壺 有 代 有

光琳

光琳の六曲一双かきつばた

薫風のなか賜ふ眼福

開け放ち天下大道へと出でて

声とりどりに市の賑ひ

母と子と月見団子も月を待ち

喰べてばかりの馬肥ゆる秋

色^ウ鳥のペントハウスに戸惑へる

トンガリ帽は正札のまま

恋人はびっくり箱のやうなひと

透ける上布の着崩れもよき

伴野末季 捌

伴野末季

杉山壽子

青島ゆみを

中森美保子

長谷川芳子

同

を

芳

壽

保

真相は闇に葬るおつもりか

死者ものいはず追悼の怪

ダンベルを上にあげれば鎌鼬

ポーナスが出た月と帰らん

達者でなほろ酔ひでいい右左

安達太良山の詩をくちずさむ

咲き乱れ花ぬすつとはいらぬ里

名残りの暖炉ぱつと燃えたつ

季　を　壽　保　芳　を　季　壽

平成十二年五月二十四日　首尾
於　山田歌子邸

蜃気楼

下り待つローカル線や蜃気楼

鋤を休める耕の人

目借時子あやす母も眠からん

明日の試験また一夜漬

更待の山の端染めて昇りたり

満を持したる初獵の犬

チェンバロの音に秋色の深まりて

イタリア料理豪華レッスン

ちよび髭がかつこよく見えこれ病

炬燵の中で恋の駆け引き

松原 弘子 捌

松原 弘子

式田 和子

紺野 千寿子

吉行 和彦

松本 碧

川名 将義

寿

碧

式田 恭子

義

抱けば溶け抱かねば怨む雪女郎

古い日記を捨てられぬまま

ナイターのドーム球場沸いて月

ジョッキ高々ビール乾杯

横町の隠居に習ふ詰将棋

談志の落語きつく滑らか

青丹良し奈良の仏も御花見

蝶の行く手に夢を追ひかけ

平成十二年四月三日 首尾
於 神田分教場

和 弘 彦 寿 碧 彦 義 恭

みなとみらい

山本 要子 捌

見下しのみなとみらいや秋灯し

大観覧車やや寒の月

蔦紅葉シャンソン低く唄ふらん

帽子につける猫のブローチ

新食材あれもこれもと取り寄せて

打ち水済ませのれん掛けたる

日和下駄鼻緒^ウすげかへ夏祭

かたかた上る駅の階段

フォーカスにすっぱ抜かれし朝帰り

また恋人はママに似た人

池田 やすこ

鈴木 美奈子

松本 碧

山本 要子

奈

同

要

や

碧

や

皇帝の涙受けにと壺ささげ

木枯抜ける馬車二頭立て

半月に梟片目つぶりをり

つひにITかかはるまじく

暁斎のお化けの眠るお蔵河岸

日永柄杓で空ける樽酒

五輪旗はアクロポリスへ花と行く

姫虻群れる神々の郷

平成十二年十月二十日 首尾
於 よこはまグランドインターコンチネンタルホテル

奈 碧 や 要 碧 奈 や 碧 奈

短歌行 小さきふぐり

中野 昌子 捌

嬰^{みどりこ}児の小さきふぐりや蝸牛

枝滑らかに百日紅咲く

カンバスに即興の筆走らせて

ぼろぼろこぼす食パンの屑

名^ナ月に尺八を吹く留学生

秋の拾の巧き着こなし

青蜜柑熟さぬ肌にとどこか似て

他人の名刺渡すきぬぎぬ

ご先祖の墓の隣に猫の墓

おんぶお化けと車座で飲む

なんのこと花一片が夢現

魚島時の海のざはめき

中野 昌子

近藤 守男

今宮 水壺

山口 美恵

昌男

恵

壺

昌男

壺

恵

昌男

壺

ナオ
春障子開けて引越蕎麦受くる

物見遊山の会議おざなり

爺さまの自慢の時計コチコチと

サルトル論に沸きしかの頃

つくられし女の性のいとほしく

ひとつ布団で語る行く末

寒き影月明り背に遠ざかる

真つ暗くらの大木の洞

ナウ
かくれんば修道院の農具小屋

趣味はドライブ二級整備士

ルーキーのメモリアルアーチ花万朶

ちぎれ雲浮く丘ののどけさ

平成十二年七月二十四日 首尾
於 桃径庵

男 昌 恵 壺 昌 男 昌 壺 昌 男 昌 壺

簾 蛤と化る

百武 冬乃 捌

蛤と化るべく雀発進す

柞紅葉を透かす昼月

仮名文字の短歌したたむ秋興に

ベースギターの何処からとなく

焼肉の匂ひ充滿バンガロー

蟬の脱殻手に帰る子ら

仰ぎ見るお鼻の欠けし磨崖仏

大先生と廻る敦煌

生葉を煎じる老婆ひとりごち

今は昔のめくるめく恋

着痩せする姿いとしき花衣

共寝のシーツ春の蚤追ふ

百武 冬乃

吉村 ゑみこ

副島 久美子

こ

久

こ

久

こ

乃

久

こ

久

ナ
オ
ジョン・レノン記念館まで霞む道

首都圏移転打算果なし

断層の真上に住んで五十年

柱時計を朝夕に巻く

爛酒の好み交々月笑ふ

寒中水泳鯨の水着で

ナ
ウ
バンドナを結び盲導犬静座

四柱推命しかと調べる

吸ふ場所をいつも探して愛煙家

藍染めクツション友と手作り

花の丘教会の鐘鳴りひびき

岬かすかに穀雨終日

平成十二年十月十一日 首尾
於 池袋 滝沢

こ 乃 久 こ 乃 久 同 乃 久 同 乃 久

発句 猫六句

秋元 正江

あはゆきを耳につけし仔猫かな

ひたとある猫の体温稲光り

黄落の真間の継橋猫あるく

庫裏で食ふさうめん猫も坐りけり

十六夜の猫うづくまるもがりかな

恋猫のよぎる単線まろびつつ

表合せ あはゆきを

あはゆきを耳につけし仔猫かな

秋元正江

珈琲熱く花冷の卓

倉本路子

ピチカート春の飲み奏づらん

橘 朱鷺子

明日掘り出すタイムカプセル

路

透綾着てこの夜のほかの夜に坐る

江

無言詣に面包む人

朱

あ

と

が

き

二十一世紀のはじめ第十一号をお届けできることは、大変喜ばしいことと存じます。

春寒料峭の三月十四日『猫蓑作品集』の校正にお集り下さいました、梅田利子・久保田庸子・桑原美津・八代嫺・山田喜美枝・吉藤とり子・吉村多みこの各氏に御礼申し上げます。

平成十三年三月十四日

下 鉢 清 子

猫蓑作品集 XI

平成十三年四月吉日 発行

発行人 東 明 雅

発行所 猫 蓑 会

定価 二千円(送料別)

印刷所 株式会社 岩田印刷



